
短編

みゅうじん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編

【Nコード】

N5720R

【作者名】

みゅうじん。

【あらすじ】

格1話完。暇な時にでもどうぞ。感想ページからリクエストください。

※亀更新。基本BLノンジャンルで

続くかもってのには・・・がついてます

色（前書き）

人を色に例えるヤツとそいつの話し

色

「だって俺、お前みたいな濃い良い色になんかなれないもんさあ」
元々色素の薄い天然の茶色頭がふいと前を向いた。
濃い良い色とは、一体どんな色なんだろうか。

「え？ どんな色って……んー…人間色？」
人間色？

「そーそー、ニンゲンイロ。俺そんな良い色になんかなれねーっばいから、羨ましいわ」
なれねーっばい。

そう、にかつと笑って、千里は手に持った水をグイグイと飲み込んだ。

俺はそんなに濃い肌色でもしているのだろうか？ ……部活はバスケをやっているけど、学校では屋内スポーツの枠に入る。たまに公園で名も分らんヤツと1on1とかしてるけど、肌が濃く焼ける程やっているわけでもないし。

髪の毛も染めているわけでもなく、完全な真っ黒クロスケ。目立つような色なんて生えてもなく。『濃い良い色』なんて呼ばれるような色には聞き覚えも見覚えもない。『人間色』もそれと同じだ。

じゃあ何なんだ。コイツにはヒトのオーラでも見えるんだろうか。
「オーラ？ ……とかじゃないんだよなー。なんだかなー、わかんねー？」

わかんねえよ。

「んじゃ、まあいーや。諦める」
「ああ…、そう」

真夏の空。入道雲から突き出て飛行機雲が1本、線を描いている。ミンミンジージーと鳴くセミの音は夏の風物詩。気持ち悪いくらいに耳に響いた。

大きな1本の木の下にあるベンチは木陰でいい感じに冷たくなっ

ていて、それに涼しかった。

「なあ」

「うん？」

「その濃い良い色…ってえの？ 俺は何色なんだ」

色にも何千種類もある。その中で俺は何色なのか。別に、特に興味はなかったけれど、こいつの言ったその濃い良い色の話を聞きたかった。

「お前はねえー」

んー。っと左目を閉じ右目を薄くさせて俺を敵意無く睨み上げる。両手の一指し指と親指で長方四辺形をつくりそこから右目で覗き込んでいる状態。

ガキっぽい仕草は出会った頃と変わらず。見慣れてしまったそれにはもう何も言わなかった。

少し間を置いて、真面目な顔をしながら千里はこう言った。

「水色の混ざった紺色」

「ふうん」

よくわからんが、とりあえず相づちを打っておく。俺は何千種類もある色の中の水色の混ざった紺色だそうだ。…本当にわけがわからん。

俺も千里も色の名前なんて青とか赤とか、大体の大雑把な物しか知らないし、これまで覚えようとしたことも無い。美術で『琥珀色』なんてかつこ良い色の名前が出ていた気がするけれど、それは果たしてどんな色をしているのかも分からない。

「お前いつも静かだけど、優しくて、ちゃんと周りとかも見えてやんの。キレイたるところんキレイまくってウザイのなんの……」

「おい最後悪口だぞ」

「でもこういう色は嫌いじゃねえの俺。地味だけど見やすい色してるしさ、でももうちょっと人間ぽい方がいいかなー」

その人間ぽいてのが人間色の事か。

「俺の色は嫌いじゃねえって……お前どんな色嫌いなんだ？」

「黒色。まーっ黒で、すっげ真っ黒で。大嫌い」

口を尖らせ不味い物でも食ったかのように渋い顔をしている。

「まあ……俺は良いと思うけどな」

その言葉に、渋い顔がこちらを向いた。

物好きだな……みたいな風にドン引きしている顔。

「グロテスクな色してるじゃんかよ。きったねーし」

「そうか？」

「んー……やっぱ理解されないかぁー」

「お前の感覚は珍しいからな」

「そんな珍しい俺と一緒にしてくれるお前が珍しいっての……っ……」

渋い顔が一転、何が面白かったのか、声も出さず腹をかかえ足を伸ばしケラケラと笑う千里に、俺は苦笑した。

別に間違ってはいないんだから。

珍しいお前を好いてる俺は確かに珍しい。

「あっ」

そいつの制服のズボンのポケットからヴヴヴ……とバイブが鳴った。震える携帯を右手で捕まえ、画面を開いてそれを止める。そのまま画面を閉じてるという事は、着信とかではなく、アラームだったようだ。

「あ、ごめん。俺もー帰るなあ」

「用事か？」

「バイトの時間」

「ああ、そうか。じゃあな」

「おう」

ベンチから立ち上がりそのまま俺を見向きもせずにはバイト先へ向かった。

アイツの生い立ち是这样だ。

生まれてから施設で育ち、小学3、4年の時に養子としてこの地域に越してくる。高校に入ってすぐ養子として引き受けてくれた両親が他界。今は高校までやめて何個かバイトを掛け持ちしながら自

分で生活している。

波乱万丈な人生を送っているそいつには、実は弟がいる。小学3年生。物静かで、お兄ちゃん子。俺もその弟とは面識があり、アイツがバイトで家を空けてる休日に、よく一緒に遊んだりした。

何度も自分が好いてる千里に金の支援もしてやろうかとも思ったが、それはアイツにとって良い迷惑なんだと考えた。自分一人で弟連れて、この社会で這いつくばってでも生きようとしている奴に対して、それは、大きな侮辱行為なのだ。同情されている感じで、逆に傷つけている。

だから俺はただ見守ってやっている。笑顔でそいつの傍にいてやっている。忙しい中で女と恋愛もできない状況。そんな奴の横に俺がいる。

特権だ。悪いけど。

アイツが恋愛する暇ないほど忙しかったら、俺はいつまでもソイツの横にいてやれる。

「ひでえヤツ」

なんて、苦笑をもらした。

*

事態が一変したのが、ある日の蒸し暑い夜だった。俺の親は所謂『金持ち』と言う奴で、敷地の広い1軒屋に比較的大きな車庫付き。3階建てで、キッチンも1階と2階に2つもあるほどの超家庭。

勿論俺の部屋はクーラーも完備してあって、こんな夏には持って来いの部屋だった。その日も俺は電気代での字も気にせずクーラーを付けっぱにしまったまま眠りに落ちた。

そんな深夜。涼しい部屋鳴り響いた。

表示名は『非通知』

こういうのは大体千里からの電話だった。携帯電話も家電話も持っていないアイツは、自分の家から少し離れたところに設置してある公衆電話から電話をかけてくる。

これも節約なんだろう。

10円を使ってほんの10秒ちよいで、伝えたいことをマシンガントークし、そして勝手に切れる。4、5日に1回くらいの頻度で、たまにくるそいつからの電話。

それでも、あんな子供っぽい行動を取るが人の迷惑も考える奴。

こんな深夜に電話がかかって来る事は無いので、少し不審に思いながら電話をでた。

「あ……あ……っ」

「……？ もしもし」

「っに、兄ちゃん?!」

「裕太か、…どうした？ お前の兄ちゃん」

電話主は、弟。初めてのそいつからの電話に、千里じゃないという結果に少しガツカリした。

ガツカリはしたけれど、その、どこか切羽詰まったような裕太の声に不安が募る。

「ど、しよ。俺っ…どうすればいいのかなっ!? ……ちい兄が」

悪い意味で興奮気味。テンパってる状況なのは、すぐに分かった。部屋の電気をつけて、耳にくっつけたスピーカーに神経を研ぎ澄ます。

「おい、落ち着いて喋れ。っどうした？」

「ち…に、ちゃんが」

「……」

「倒れた——」

さっきの不安が当たった。

公衆電話のタイムオーバーストレスの言葉。ツーツーツと流れる音に、少しだけイラっとした。

『兄ちゃんが倒れた』

俺はジャージとTシャツの格好のまま自分の部屋をでて家を飛び出した。クーラーが効いた部屋を出ると一瞬にして蒸し暑い重い空気が俺の身を包む。

自転車をガシガシ漕ぐと、熱気が襲ってきた。その熱気で汗がで

て、ベタベタして、気分も最悪で、俺はそんな最悪な状態で電話元の家へと急いだ。

錆び付いたぼろぼろのアパート。目的の部屋の隣にはくもの巣も引っかかっている。

息を整える暇も無いほど、俺は乱暴にそのドアを開いた。小さな1Mもない玄関。ドアを挟む隙もなく居間があるほどの古い部屋。入って一瞬、身が竦んだ。声も出せない程の震え。

「兄ちゃん……ちい兄が…」

目を見開いて肩をダラっと倒し布団の上で寝ている千里の横で正座をしている弟は、そんな俺よりも震えて見えた。

きっと自分より倍も小さい体から一生懸命力を振り絞ってそいつを布団に寝かせたんだろう。額には濡れたタオルが置いてある。頭付近にある洗面器には水と氷と、も一つタオル。

「救急車は？」

「病院には連れてくなって……！ お金、…かかるからって……」
アホだと思った。

「……」

コイツは少々、…いやそれ以上。自分の体を酷く扱いすぎている。怒りが溢れた。

「バカか、お前は——」

弟に聞こえないよう、小さくそれだけ呟いた。

その言葉に反応するように小さく短く声を漏らしたそいつに、弟はまた声をかける。

「ちい兄っ！ 大丈夫？！」

「ん……ああ。…ごめんね、起きた起きた。少し疲れてただけだよ」
何が少しなんだ。

目を覚まし、状況を悟ったその布団の上で苦しそうにしているソイツは、自分のつらさよりまず先に、顔を涙でぐしゃぐしゃにしている弟に優しい笑顔を見せた。その笑顔にはつらさのカケラも無く。立派な兄貴をやったのけていた。

「智」

弟の涙を拭きながら、顔も見ずに俺の名を呼ぶ。怒りが爆発しそうな気持ちを弟がいるからと言う理由で抑え、俺はなんだ、と返答した。

「悪いんだけど、今日だけ。裕太泊まらせてくんないかなあ？」

弟、……だけ。

「嫌だよ！ 俺ちい兄の傍にいろっ！」

「困ったなあ、お願い裕太。今日だけだから……」

「嫌だ！ ここにいる！」

「兄ちゃんの事困らせないでよっ……ね？」

「……っ。分かった。……でも今日だけだからっ！」

鼻水を吸い、また今にも泣きそうな顔で強気な顔をする。

「良い子だね、強い赤色」

強い赤色。

この前の昼のあの会話を思い出した。俺は水色の混ざった紺色。強い、ってのが入っていると、弟は戦隊モノの赤レンジャーってとこなんだろうか。やっぱり意味は分からないけれど、いつもそんな話しをしているのか、弟は嬉しそうに顔をパアッと明るくさせた。

「分かったが、……俺はすぐ戻ってくるからな。バイト行ったらお前も俺ん家行きだ」

「わかったわかった」

怒るのはこいつがちゃんとバイト行かずに家で寝ていて、それらの話した。俺は力が籠もりそうな手を一生懸命緩くして、弟の手を握ってその家を出た。

小3の男子が速いスピードで怖がるか、なんてのは知らないし、自分の経験も忘れたが、怖がったらそれもまた千里に逆に怒られそうなので、極力ゆったりとしたスピードでペダルを漕いだ。

後ろで俺の腰に腕を回し、声も出さずに少しの時間堪えた涙を流す弟に、俺はそれらしい言葉なんかかけてやれなかった。

「お前の兄ちゃんは大丈夫だから。心配すんな」
根拠なんて無い言葉。

何が大丈夫なんだ。ていうか他人が何心配すんなどか言ってるんだ。弟がもう少し年を経たらきつと、こんな事を言うんだろう。まだコイツは純粹だ。声を出さずに頭を俺の背中に寄せうんうんと頷いた。

「母さん、コイツ今日ここ泊まるから。千里の弟」

「今日？ 千里君はいいの？」

俺の家。母さんを半ば強引に起こし、裕太のお泊りを請う。

「ああ、俺今日アイツん家泊まるから。とりあえずよろしく。俺んところで寝かせて：裕太、一人で寝れるな？」

また無言でコクつと頷く。

「泣いてるよ？」

裕太の頭を撫でながら一言。

「母さんが慰めてやって」

「んもう：智は甘えん坊だなあ！」

「何って俺が甘えん坊なんだよ？！ てか、俺もう行くぞ！」

「あい、いつてらっしゃい。あんま迷惑かけちゃだめよ？ 千里君によろしく」

俺の母親はある意味天然というか、母親らしくない母親だった。怒る時にガチ切れする俺の性格はまあ母親譲りだが。そんな母親だ。弟も少しは安心して寝れるだろう。

俺の親への反抗期はとっくに終わったので、こっちの方こそ安心して裕太を母さんに預け、また全速力であの家へと戻っていった。息はまた切れ、家と家とを1往復半もした俺の体力は限界に近かった。

そんな状態でアイツが家にいなかったら、イラつきでこっちのが倒れるだろうと思ったけれど、そいつはちゃんとそこで静かに俺を待っていた。

「ありがとね」

最初の発声はお礼だった。

「裕太に心配かけちゃったなあ」

2番目は後悔と悲しみ。

「明日のバイトまでに治さないかね」

3番目は仕事の心配であり、やっぱり自分の体を心配ではなかった。

「ふざけんなよ。てめえ、どんな仕事してんだ。バイト何個掛け持ちしてる……?」

「そんなにバイトはしてないよ」

よく見てみれば、こいつの目の下には濃い隈くまがある。…こんなに濃いのに、何故気が付かなかったんだろう。炎天下で浴びる明るい太陽の逆行? いつも涼しいほど暗い日陰にあるベンチに座ってるから?

そんなんで気付かないって程薄い隈ではない。

よく周りを見ているなんてこいつは言ってたけれど、こんなデカイ状態変化の一つも見つけられないで、周りを見ているなんて言えない。

「言え。まだ俺に言っていないのがあるだろ」

問い詰める感覚ではあったが、幸いコイツは病人。逃げられはしなかった。

「ノーコメント」

「言えない程のバイトしてんのか」

俺の声が低くなったのに気付いたのか、小さな声で今やっているバイトを話しはじめた。

「そのコンビニと、スーパー……漫画喫茶、居酒屋……」

そのコンビニ。この家から2分も掛からないところにあるコンビニ。そこでバイトをしている事は知っている。スーパーでバイトをしてんのも知っている。土日バイトの漫画喫茶と居酒屋も、よく知っている。

だから、俺はそんな事を聞きたいわけじゃねえんだ。

「深夜、……何をやってる？」

「……」

「言えよ」

「……」

「言えっ！……！」

無言のままの部屋に、痺れを切らした俺の怒号だけが響いた。遅れて隣の家から壁を叩く音が聞こえる。壁が薄いから俺の声も普通に届いてんだろう。うるさいと言う意味の叩く音。

「裕太が俺に言ってきてんだ。夜遅くにお前がいらないから少し寂しいって。……深夜は家で寝てるって言ってたよな？」

「……」

「何とか言えよ」

「俺……裕太を母さん達の親戚に預けようと思ってんの」
話しをズラされた。

なんて思っただけで、これはかなり重要な話だったのかもしれない。思わず聞き返す俺の声はかなりまぬけていた。

「あそこの叔母さん、裕太の事だけは好いてくれてるから。こないだ話したらいいよって言ってくれたんだ。もちろん、裕太の学校とかの金はちゃんと払うし……」

「お前も裕太も、それを望んでんのか？」

「裕太を一人ぼっちになんか出来ないだろ。寂しいと思ってるんならもっと出来ない」

さっきの深夜の話しどうのこうのは、墓穴だったかもしれない。裏手に取られて、俺は何の反論も出来ない。

「俺一人ならバイトに専念できるし。裕太が嫌がったら、嫌われるような事してでも叔母さんここに連れてく」

血は繋がってなくても、弟はこいつにとってただ一人の家族だった。親戚にはコイツは酷く嫌われてるらしいから、一番の心の拠り所は俺よりも裕太だったんだろう、なのに。

お前はそれすらも手放すってのか。

「俺はお前が何と言おうとそうするよ。……俺と家族の事だから、
…智には関係ないよね？」

距離を取られた気がした。

そりゃそうだ。否定しようが無い。だって自分の家族の事についてとやかく言う権利は他人には無いんだから。

だけど何か、俺とコイツの距離がまた開いた気がした。他人だけど他人より近いこの距離が。本当の他人になりつつある距離。

そんな恐怖。

恐怖を覚えるけれど、やっぱり俺に何かを言える権利はなく。

「分かった——」

小さくそう答えたその1週間後。裕太が親戚の元へと行った。

どういう風に説得したかは分からないが、その日のソイツの顔は倒れたその時よりもやつれていて、それでいて泣きそうで、思わず抱きしめそうになった。

思えば何で抱きしめなかったんだろう。と思ったけれど、思った時にはもう遅かった。

裕太が親戚の元へ行った2日後。

茶色頭のソイツは、俺の目の前から姿を消した。

コンビニもスーパーのバイトも全部のバイトをやめていて、この街から千里の気配は完全に消えていた。誰にも何も言わないで、俺にも何も言わないで。

「……」

どこに行ったのかも分からない。日本は世界からみたら小さいけれど、俺から見たら嫌と言う程広く。こんな広い世界のどこかにアイツはいて、でも俺の横にはいなくて。

震えた。

完全な他人になったのだ、俺とアイツは。

ああ、そうだ。俺にはまだ聞かなければいけないことがあったんだ。

俺は水色の混ざった紺色の濃い良い色で、裕太は強い赤色で。ア

イツはグロテスクな黒色が大嫌い。じゃあ、そんな自分は一体何色なのかと。

そう千里に、聞かないといけないんだ。

コレで離れたからじゃあ終わり、さようなら。なんて事には、俺は絶対に出来なかった。そんな性格だったと言うか、千里が俺にとってそんな存在なのだ。俺は千里を好いている。

絶対に見つけない。

心からそんな風に思った。

＊

何年もたったが、それからのソイツの消息は分からない。

裕太のいる親戚の家には、毎月一定額の金が銀行に振り込まれてくるそう。だけれど手紙も電話も何の音沙汰もなく。どこで何をしているかも分からない。

裕太は『ちい兄が生きてるならそれでいい』と強気にそう言うが、目の奥が潤んでるのは知らない事にしておく。

「だって俺、強い赤色なんだよ！」

「……そうだな」

ガシガシと頭を撫でてみると子供扱いするなっ！ と手を払われた。アイツがもし頭を撫でたらどうするんだろうな、コイツは。

「ホラ、もう行け。学校遅れるぞ」

「うん！ あ……」

俺に背を向けて少し走りだした足がとまり、ふいにこっちを向いた。

「兄ちゃん来月転勤だっけ？」

「おう、今月末にはあっちの家に行くけどな……寂しいか？」

「そ……んなわけねーだろっ！」

また強がり。幼さが残る裕太は、あの時の千里に随分似ていた。

「……あの、……もしちい兄見つけたら、俺は元気だと言っていい！」

「ああ……わかった」

希望を捨ててない裕太に、俺も少しだけ勇気を貰った。

大学を卒業してこの街にある、父さんが社長をする会社の下っ端会社から俺の社会人生活は始まった。頑張った甲斐あって、東京本社 of 近くにある兄弟会社の社長を譲り受けた。兄弟会社といってもやっぱりまだ規模は小さい。俺が育てるべき会社。

大出世だ。業績を伸ばせば世界を見る視野も広がる。今度こそアイツを見つけれられるかもしれない。

そんな希望の少ない小さな思いで俺はこの街から東京に移った。その数年後。

深夜にネオンが光輝く、人がアリの行列みたいに大勢いる街。

ふいに顔をそらした先に見えた人物。

顔だち、目にすっと入るその姿勢。色素の薄い茶色頭。あの夏、最後に見たアイツとの姿に完全に一致した人物を見つけた俺の息は、一瞬、ヒュッと止まった。

色（後書き）

自分もこういう事やる・・・ていうか、感じるのか・・・？たまーに人を色に例えることがあります。

人もそうですが・・・文字とか数字とか、そんなのも色に例えたりします。他人に話したら全然理解されなかったんでwwこれは一体なんなんだww

・・・って話しです。はい。

A↓赤 B↓青 C↓黄色

理解できた・・・？

NEXT↓ 灰

灰（前書き）

バルルさんのリクエスト？で、色の続編。
てか大まかな千里視点・・・
なんか意味不明になったけど、まあそんな感じですよ・・・。

灰

その人の腹が、日を追う事に段々と膨らんでいく。不思議にジツと腹を見つめていると、その人が俺を呼んだ。俺の手を優しく掴んで、それから、俺の手とその人の腹が触れる。

「っ……」

ハツとした。

とんとんと、時々ドアを小さく叩いてるような、そんな柔らかな感触がする。ビククリして目を見開いていたら、その人が笑って言った。

「ヒトが産まれて来るんだよ」

俺は、こんな感じに腹の中にいて、そしていつか腹の中から出てきたのか。この人も、この人が好きなあの人も。そしてこの命の塊もこれから――。

俺はその腹をもう一回、出来るだけ優しく撫でてみた。それで、腹の中に宿ったその命を撫でさせてくれたその人がこう言った。

「もうすぐお兄ちゃんだね」

もうすぐこの命が腹の中からカタチを成して生まれて来る。俺が、この腹から生まれてくるその命のお兄ちゃんならば、その腹の主のこの人は、俺の何なんだと。

この腹から生まれてくる命からすれば、この人は『ハハオヤ』で、その『ハハオヤ』からすればこの命は『コドモ』で、じゃあ、この人にとって、俺は何なんだと。

結論はすぐに出た。俺はこの腹から生まれてないから、言ってしまえば『ニセモノ』だ。どっかの誰かの腹から生まれた、誰の血と血が混ざって生まれたかも分からない、『タニンのコドモ』

もしかしくなくても、俺はここに居てもいいのか。

もうすぐこの二人はその命の親になるのに。本当の『カゾク』になれるのに、俺はここに居てもいいのか。居てしまってもいいのか。

居ちゃっていいのか。居ちゃったら駄目だ。居たら邪魔になる。居たら迷惑になる。居たらまた痛くなる。

「君、お父さんとお母さんはどうしたの？　もう夜遅いから、帰らないさ」

俺は家から居なくなろうとした。思い立ったら、すぐにその家を飛び出していた。

「家出か？」

そんなものじゃなくて。そういうものじゃなくて。俺は本当に、その家から逃げるようにして飛び出してたかもしれない。その家が俺を追って来なくなるまで逃げた。後ろなんて振り向く暇なく走った。確認はしてないから、多分何一つ自分を追っては来なかったんじゃないだろうか。

それでも走った。

逃げて、逃げまくった。

何が何でも捕まりたくはなかった。

「家はどこだ？　名前は？」

捕まった。

ケイドロで例えれば、『ケイ』の方。帽子を被って、何やら棒を腰につけて、トランシーバも持っていて、何やら完全装備の男が俺の事を誰かに事細かく報告していた。

怖かった。

この人は知っている。俺をあの地獄から救ってくれて、俺を箱に閉じ込めた人達と同じだ。格好も、あの時と何等変わりはない。

「今から、お父さんとお母さんが迎えに来るから。あんまり迷惑かけちゃ駄目だよ」

交番の中で、完全装備の男の人にそんな事を言われた。

違うよ。あの人は俺のお父さんでも、お母さんじゃないんだ。俺はあの腹の中から生まれてない。俺はあの人達の子供じゃない。本当の子供がもうすぐ産まれるんだ。これから迷惑かけちゃうから。これは迷惑じゃない。邪魔しちやいけない。邪魔なんか出来ない。

邪魔にはなりたくない。

「千里っ……！」

『もうすぐお兄ちゃんだね』

ふいに優しい声が俺の名を呼んだので、泣きそうになって、必死に止めた。

「どこ行ってたんだ！ 心配したんだぞっ！」

腹の中の子供のチチオやは、柔らかなキミドリ色。

「こんな遅くまで……お腹空いたでしょ？」

腹の中の子供のハハオやは、優しそうなクリーム色。

初めて会った時から、その色は変わらない。

「「お家に帰ろう」」

優しい言葉が、怖かった。

「家って、……誰の？」

「千里と、母さんと、父さんの家だよ」

2人の家はあるそこだ。でも、俺の家はあるそこじゃないだろう。

「俺は、オジサンとオバサンの子供じゃないよ」

キミドリ色とクリーム色が、一瞬だけ歪んだのを今でも覚えてる。何を思ったのか、何を後悔したのか、何が悲しいのか、何を間違えたのか。俺は所詮タニンの子。そんな奴を連れてきた、自分等を責めたてているのだろうか。

「ごめんなさい」

一瞬だけ歪んだその色が、妙にグロテスクな色をしていて、訳も無く謝った。余りにも中身が空っぽの謝罪すぎたので、俺は言った後にその謝罪の理由を付け足してみた。

「オジサンとオバサンの邪魔しちゃって、ごめんなさい」

今度はグロテスクな変色ではなく、色の何もかもが透明になって行くのが見えた。小さかった頃の俺にはいままでそんな色の変動なんか見た事も無く、本当に困惑していた。人生で初めての出来事だった。この色が消えちゃったら、人間はどうなるんだろうか。もしかして一緒に消えちゃうとか。透明人間になっちゃうとか。子供の

頃はそんなありえない事ばかり頭をよぎっていた。

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい。ごめんなさい」
謝った。

単純に、色が透明になっていくのは怒っているからだと思っていた。俺に怒りを覚えて覚えまくって、色が消えてんじゃないかと。

「それ以上謝るな」

オジサンのいつもよりも野太い声が振り降りてきて、ビクッと体が震えた。

「謝るな」

もう一度聞こえてきた声をよく聞けば、涙声だった。声が震えていて、何故だろうと顔を見上げてみたら、オジサンが泣いていた。なんでだろう。俺は何かしただろうか。ちゃんと謝ってるのに、それに怒ってるクセに謝るなって、この人は何を言ってるんだろうか。

「お前が何と言おうと、俺はお前の父親で、母さんはお前の母親だ、」

力強く。キミドリ色が、強く優しいミドリ色になった。目には俺を写し、そんな事を言った。俺はビックリした。その言葉だけで何故か体の力が抜けるほどの安心を覚えたもんだから。

「千里っ?!」

その場にヘタツと座りこんだ俺を両腕で支える。その手があまりに大きくて、目から涙が溢れだした。温かくて、温かくて、胸が締め付けられるたび、嬉しいなと、そう思った。

「おとーさん、……おかーさん……」

「……っ」

謝るなど言われたので。

「ありがとう」

一生忘れる事はないであろう、感謝をした。

その日俺は、生まれて初めてこの二人を『お父さん』『お母さん』と呼んだ。

*

それでもう少しだけ月日が流れて、祐太が生まれた。生まれて初めて、生まれたばかりの赤ちゃんをこの目で見た。猿みたいな顔をしていて、その時もまだ俺は十分体も思考も小さかったけれど、それでもその赤ちゃんを見て『小さい』と感想した。

それともう一つ、俺が学んだこと。

「真っ白だ……」

どんな色にもなれる、シロ色。このシロ色はこれからどんな色になるのか、それを見ていきたいとか、ずっと傍に居たいとか。

優しそうなクリーム色は俺のお母さんで。

柔らかなキミドリ色は俺の父さんで。

じゃあこの幸せそうなシロ色は俺の何なのか。結論はすぐに出た。『オトウト』だ。血は繋がってない。だけど俺はコイツの生を見た。優しい母さんの腹から生まれてきた。強くて柔らかい父さんの息子で、だから守りたいと思った。

それからは幸せだった。

親子で遊園地や水族館にも行った。朝早くから映画館にも行って、ご飯を食べて、それから買い物もしたりした。

幸せだった。

「……」

その代価が来たんだと思う。

「……」

あの日より数段大きくなった体と思考で写し見る。目の前にいるのは紛れもなくあのクリーム色とキミドリ色の筈なのに。

「ああ……」

それからもう俺は知っていた。もうあの色は見れないって事。だからその思いと、これからの決意。

真っ黒な色をしたその2人を、俺は二度と忘れる事もないだろう。

——死んだら人は真っ黒になるのか。

生まれた赤ちゃんが真っ白ならば、まあそれも納得はあった。だけれどあの色をもう見れないってのは、これからはばらくは違和感を

感じるんだろう。

普通の公立の高校に入学させてもらった。それから少したった夏の日だ。俺の両親が死んでしまった。俺と、……祐太も残して。

交通事故。

そんな納得のいかない死を認めてしまった、俺が憎い。

真っ黒になってしまったその2人は、最後に、真っ白に変わった。火葬されて灰になったその二人は、白くなっていた。戻ったのかと、そう思った。もう何色にも変わる事のない白色。赤ちゃんの白色とはまた別の真っ白だった。それでも、真っ黒よりかマシで。

それが何より悲しかった。

真っ白から始まって、人間は人それぞれ自分の色を見つけ、変わり、変わり、そして死んで真っ黒になり、最後には真っ白になる。生命の循環と言うモノだろうか。

自分もあの真っ黒になってしまうのかと思うと、何故か凄く嫌気がさした。自分の色を忘れたくないと、真っ白になった両親を見た後で、自ら鏡の前にたった。

「なんで……っ」

そんで泣きそうになった。

俺はあの薄い青色さえ身に纏っていた筈なのに。何故それが灰色になってしまっているのか。黒とは程遠いまだ白っぽい灰色でも、それでも黒色に近い色と、そう認識した。

両親が死んだことでこんな色になったのだろうか。それじゃあ、祐太はどうなんだ。あの輝いた黄色も、こんな灰になってしまったのか。

「祐太っ！」

黄色がポツンと一人、居間でプリンを食べていた。

「ちーにー、」

安心した。

この子はまだ、何ひとつ変わっていない。俺とは違う。そうだ、この子はあの二人から生まれた。あの心優しい、心強い。だから俺

は、これからこの色を、これからの色を、守らなければいけない。
俺みたいな灰色ではなく、ちゃんとした、クリーム色とキミドリ色
のような優しく強い色を守らなければいけない。

そう決心して、学校を辞めた。

高校にいかなきゃ将来禄な就職は出来ないだろうが、そんな事は
どうでもよかった。将来じゃない、俺には今しか考えられなかった。
それに、祐太に苦しい思いをさせてたまるものか。そんなのは、俺
だけで充分。学校を出て、住んでいた家売り、一変してボロいア
パートへと移った。金はそのまま貯金して祐太の将来からの学費に
充てる。これからは生活費用もろもろを貯めなければいけない。幸
い学校を辞めた分時間はいくらでもある。なんだか法で、深夜バイ
トが出来ないのはきつかったけれど、それでも頑張った。

そんな一人で祐太を守っていかねばいけない俺にも、ただ一
人、一人だけ友達がいた。

「あんま無理すんなよ」

智とはほんの短い高校生活で知り合い、何故かは知らないが辞め
てからも度々会い、少しの時間楽しい時を過ごさせてもらっていた。
「ダイジョーブ、ダイジョーブ」

大丈夫じゃなかった。

楽しすぎて、その反動が辛かった。しょうがない。それが心の弱
さで、人間なんじゃないだろうか。なんて思っ、でも智を避ける
のは嫌で、だからその時だけは、存分に楽しい思いをさせてもらっ
た。どうせ何したって辛いんだし。

だからある意味大丈夫。

それからもう少したって、もうちょっとたったくらいに、俺に転
機が訪れる。

それは寒い時期になろうとしている一歩手前の時くらい。バイト
帰りに、ある一人の男に声をかけられたのがきっかけだった。声を
かけられたと言うか、最初は肩をポンと叩かれた後に、指を一本だ
け指し、それからそれをパーの形に変えるのを見せられただけなん

だが。

「何それ」

よくよく見れば、珍しい色をしたその男。

「1回5万」

びっくりした。

「5まっ……?!」

月給とか、そういうのじゃなくて、1回5万。さて、それはどんな仕事なのか、俺は切羽詰まって聞き返した。

「簡単だよ。…俺とさ、セックスしてくんない？」

耳を疑うとは、こういう事か。

目の前の男は、目の前の俺に向かってそんな事を言い出した。男で、男で。それで何がセックス？

「え……と……？」

「ん？」

何から聞けばいいかわからない。何を言えはいいのかもわからない。とりあえずあれか、この男は所謂、いわゆるゲイって奴なんだろうか。いや、ていうか、そうなんだろう。じゃなきゃ俺なんかにいきなりセックスしない？ なんて言ってこないし、ましてや男なんかにセックスで金払うわけがない。

それでも、俺はゲイじゃない。

「いや、…あの……」

「君、お金必要なんじゃないの？ 未成年だろ？ なのにこんな遅くまで、……」

未成年としててそんな事を言っていたのか。援交とそんな大差ないと思えてきた。

「1回5万」

「っ……」

「悪くないでしょ？」

月に稼ぐ給料分より、2, 3万少し少ない程度。その分が1日。しかも1回で稼げる。でも男……。そのかわりにお金がもらえる。

「……」

俺はその日、初めて男を知った。

一生知らないほうがよかったかもしれない。そう思った時はもう既に遅く、だからもう何も考えるのを辞めた。

「君、名前は？」

「千里」

「千里……千里ね。…あ、金。はい、5万な」

男が財布の中から無造作にお札を5枚取り出す。力なく受け取ったその何枚かの1万円は、苦勞して1ヶ月働いてもらった給料とは程遠い、何やら味氣の無いただの紙切れに見えた。

そうみえても、それでも金だった。

「明日、ここにおいて。金に釣られて同じ男と寝てしまうくらいだ。それ程金に困ってんだろ？」

親はどうしているのか、何故金に困っているのか。そんな事は、聞かれなかった。

「……」

男が今度は何かの名刺を取りだし、渡してきた。どこかの知らない会社名、住所と、FAXと、電話番号。

「何、するところ？」

「今さっきやってた事より、もう少しマシなこと」
「？」

「男娼とホストの……間？ 男も女も相手にする。まあ女の方が多いと思うけどな、人によっちゃ同性のが多い奴もいるけど」

「金は……大体どれくらい働けば、どれくらいの収入になるの？」

「それは、人それぞれだけどな。トップは月に100万超え、まあその月々で変わる。最低でも10〜20はもらえるだろうな」

「10万……」

偉い金だった。その分で、俺はまだ子供だったのかもしれない。
「……」

次の日、その深夜。

俺は、名刺に書かれた通りの路地裏場所へと向かった。文字通り人通りの少ない、薄暗い、そんな場所。

「あの、すみません」

少し躊躇しながら、正面入り口を通り、社員と思われる人に声をかけた。

「紹介されて、……この人いますか？」

昨日手渡された名刺をその人に差し出す。社員は何か感づいたように目を見開き、俺を中へと通してくれた。

「指名が来る度お金が入る。仕事は体売るだけ」

奥の応接室で聞かされた仕事内容は、残酷な程に簡単だった。たったそれだけ、体を売るだけで金が入る。自分がそのまま金に還元される。

夢のような話し。

「俺にそんな価値がありますか」

俺は大金が得られるような人間なんだろうか。高校を中退したガキで、成人もしてなくて、バカで、灰色で。そんな俺が、そんな大金。

「得られるように努力すればいい。顔も身体も、金で変えられる世界だ。自分の性格なんて隠してしまえばいい」

努力でなんとかなる世界。

男はそう言った。

「努力……」

金を得る為の努力、祐太を楽させてやるための努力。

「仕事、させてください」

そう、俺は努力した。

誰に気持ち悪いと言われようが、汚いと言われようが、努力した。知らない人と体を重ねて、気持ち悪い物も事もたくさんみた。

努力した。

「……また……」

努力するたびに、自分の灰色が黒々しくなっていた。それでも

努力し続けた、黒くなって、黒くなって、智と会って少しマシになって、祐太が笑うたびマシになって、それでも日に黒くなっていく灰色。それがなにより、悲しかった。

「千里、最近売り上げが下がってきたな」

1年とちよつとが経って、慣れまくった仕事。金の得る為の努力の結果が、失われていく。

昼は普通のバイトで、夜は努力のバイト。

「そうですか……」

もう、限界かもしれないと気付くには、案外速かった。

「すみません、叔母さん。突然の電話でごめんなさい。用事があつて……—はい」

俺だけじゃもう、だめだった。

「祐太を、……預かって欲しくて」

叔母には散々罵声をあげられた。それはもう苦しくも悲しくもなくて、ただ俺は溢れ出しそうな涙を必死に堪えていた。

蒸し暑いある夏の日。

「俺の負けだ……」

完敗した。

その単語だけで、俺の体は後悔で力が抜けていった。意識が朦朧とする。暑くて悲しくて、後悔。祐太に迷惑は掛けられないのに、これ以上の迷惑をかけてしまう。祐太の将来を踏みにじりたくはない。絶対にそれはしたくない。

そんな意識は遠く消えて行った。

「バカか、お前は——」

水色の混ざった紺色の濃い良い色が、目の前にポツンと灯った気がした。その色が羨ましくて、懐かしくて、その色に手を伸ばしてみた。

「ちい兄っ！ 大丈夫?!」

「ん……ああ」

水色の混ざった紺色は少しだけ距離遠く、気づけば赤色が俺の顔

を心配そうに覗かせていた。

「…ごめんね、起きた起きた。少し疲れてただけだよ」

祐太の赤色が震えている。チチオヤに似た、あの強い色が消えかかっている、少しでも早く戻して欲しくて、安心させたかった。

「智」

祐太の涙を拭きながら、顔も見ずに智の名を呼んだ。

「……なんだ」

不機嫌そうな色が、遠くから降ってきて、それが少しだけ可笑しく思えた。

「悪いんだけど、今日だけ。裕太泊まらせてくんないかなあ？」

「嫌だよ！ 俺ちい兄の傍にいるっ！」

強い赤色。

「困ったなあ、お願い裕太。今日だけだから…」

「嫌だ！ ここにいる！」

強くて強くて。

「兄ちゃんの事困らせないでよっ…ね？」

「……っ。分かった。…でも今日だけだからなっ！」

ハハオヤに似て、優しくかった。

鼻水を吸い、また今にも泣きそうな顔で強気な顔をする。

「良い子だね、強い赤色」

それが嬉しくて、こっちが安心してしまった。

「分かったが、…俺はすぐ戻ってくるからな。バイト行ったらお前も俺ん家行きだ」

お人好し、人の事を考えてくれて、周りを良く見てくれていて。

「わかったわかった」

羨ましい色は、目まぐるしく濃くなったり薄くなったり。怒りを必死に抑えている様子だった。

「行くぞ、祐太」

「うん、……」

祐太の手を引き、軽くボタンと戸が閉まっていく。カンカンと、

二人分の階段を下りる音が聞こえ、もう少しだけして、シーンと、静かな音が響いた。

「……」

隙にバイトに行ってしまったかと考えたけれど、濃い良い色がダメだと言ったので、行くのを諦めた。別に怒られても泣きたくも悲しくもならない。少しだけの謝意が生まれるだけ。

「ははっ」

なのに何で行かないのか考えたら、その答えに笑えてきたもんで。俺は薄気味悪く一人で笑っていた。

なんで倒れたのか、多分それはただの疲労だったんだろう。少しの時間寝て、ごはんを食べて、それからずっと仕事をしていたもんだから。

倒れたときに、俺は少しだけ、もう終わってしまいたい。なんて、そんな事を考えた。その後ろに想ったのが、キミドリ色と、クリーム色。あの二人は終わった時に、真っ黒になって、真っ白になった。俺は真っ黒になるのが本当に嫌だ。嫌でも、その後に真っ白になれるのならば、それならそれの方がいい。

灰色。

どんどん濃くなるその色は、良い色なんて到底呼べる物じゃない。真っ黒はそれ以前の問題で、何色にも変わらない色は、悲しい色。『変わる』と言う希望も奇跡なく、ずっと白であり続ける。何色にも変わらない。

「それで、いーんじゃん」

悲しい色でも、黒色にはならない。それでも、白以外の色を纏えない。

俺はいままで、どんな色を纏ってきただろうか。

「変わるシロと、意味を含めないアオムラサキと、幸せなオレンジと、薄いアオと、汚いハイと」

たった5つ。たった5つで、それだけで終わってしまった方がいいのか。このまま灰色が黒濃くなり続けるなら、終わってしまった方が

マシだ。

「――」

それでも、俺は。

「馬鹿か、お前は――」

色が、目の前にポツンと灯った。

「お前が死んだら、祐太がお前の色になる」

「……祐太が、灰色……」

絶対に阻止したい未来。

それでも、じゃあ、俺はどうしたら……。

「俺は、灰色じゃない、違う色になれるのかな？」

「得られるように努力すればいい。努力すれば手に入れられるのは、何も金だけじゃない。変えようとすれば、その色だって少しくらい答えてくれるだろ」

努力。

努力すれば。

「どうやって……」

「――」

答えを教えるはくれなかった。そのままジリジリと今にも消えていきそうなその灯った色を、俺は泣き出しそうな目で見つめていた。
「バカか、お前は――」

泡のように消えていく色と変わるように、水色の混ざった紺色の濃い良い色が、目の前にポツンと灯った気がした。その色が羨ましくて、懐かしくて、その色に手を伸ばしてみた。俺はいつしか、こんな濃い良い色になってみたいんだ。

「……」

それは、些細な夢、だったんじゃないだろうか。

＊

祐太を叔母さんのところに預けたのは、その1週間後の事だった。ちゃんとした説得はしていない。ただ少しの説明と、最後の別れ。
それだけで、祐太の強い赤色が暗くなっていくのが目に見えて分

かった。気持ち悪くなったので、その場から早々と離れた。

あれで良い。

これで良かった。

邪な気持ちを必死に遮った。きっとこれが最良な選択。暗くなっ
たって大丈夫。あの強い色はきつと衰えることなんか無い。あの二
人の子供なんだから。

だから祐太は大丈夫。

「さてと……」

気持ちを抑えて、俺は最後の準備に取り掛かった。

あらかじめ今月末で辞めると伝えた全てのバイト先へと向かい、
制服を返したり、最後に給料をもらったり、最後の挨拶をしたり。
一区切りついた後に、俺は疲れ果てた体で濃い良い色と会った。

「祐太は行ったのか？」

「うん」

目に程よく落ち着く色。

声も、存在も。

「……泣きたいなら、別に泣いてもいいんだぞ」

優しい声に、つつい甘えたくなった。

「泣かないよ、」

俺は絶対、泣いてなんかやらない。智のような濃い良い色を身に
纏って、そしたら、おもいきり、存分に、溜めてた思いを吐き出
してやる。

絶対に泣かない。だから、俺は胡散臭いくらいに満面の笑みを作
ってやった。

「じゃあ、俺行くね。」

「ああ、おやすみ」

「うん。サヨナラ」

最後の挨拶は、1秒も経たずに過ぎていった。

「……」

自分の色を見つける為に。灰色が完全に黒くなってしまわないよ

うに。そうだ、努力。その為に俺はまず、弱音何か吐いてやらねえ。

それでも最後に何か一つだけ弱音を吐いてもいいとするならば。

俺は多分、あの濃い良い色も、それを纏うその存在全てが。

好き、だったのかもしれない。

灰（後書き）

千里が何もかもを辞めてその街を出たのは、自分の色を自分自身で見つけないでいい、その為の努力は、思い出の多いこの街ではできないと思ったからじゃないでしょうか。あと、ちょうどその時にちゃんと仕事しないかって夜のお仕事から誘われてたって設定です・。。

千里をその仕事に誘った男は、珍しく2つの色を身に纏ってます。ウチもこないだ初めてみましたW学校の先生なんですWテンションあがったWWW
下半身が青で、上半身が赤。

その男も、そんな感じの2つの色を持っていて、千里は興味を示したんじゃないんでしょうか。多分智みに濃い良い色をしていたんじゃないかと。。。

てか書いてて思ったんだけど、親が二人ともいなくなつて、誰か育ててくれる身寄りがいないんなら、施設行くんじゃないん。。。。
だって千里高1エ。。。。

まあ、小さな事は気にしないで。。。。。

NEXT↓ 俺の先輩、俺と後輩

俺の先輩、俺と後輩（前書き）

後輩と先輩の話し

俺の先輩、俺と後輩

「先輩好きだ」

まやま
真山。

俺はソイツを真山と呼んでいる。下の名前は平仮名で『まどか』と言って、ソイツはその名前を嫌っている。別に決して悪い名前では無いと思うけれど、ソイツは何故か、自分の名前を否定的に見ていた。

「まどか」

「殺すぞ先輩」

たまにわざと下の名前で真山を呼ぶと、普通一般では発達していない筈の耳の筋肉がぴくりと動きを見せる。俺はその意味が無いにしては凄すぎる動きが神秘的に思えて、その『たまの意地悪』が好きだった。

＊

真山とは高校時代からの付き合いで、俺は今年高校を卒業し、今は志望通りの大学に通っている。真山は今高校2年生で、俺の2、3個年下。メルアドと携帯番号を俺の卒業式の日に交換して、それからは頻繁に電話がかかってきた。それは『勉強を教えてくれ』と言う命令メールだったり、『何処かに行かないか』と言うお誘いメールだったり色々。

今日のメールは、『メシ作って』というおねだりメール。年下の癖して大学生にメシを作れとメールで余裕に言っただけのける真山が腹立たしくて、俺は件名に『俺の家こい』と、それだけ打って真山に送信した。

そのメールから約1時間後に真山が俺の家に着した。

真山が俺の家を見るのは初めてではないが、家の中に入るのは、今日この日が初めてだった。

「へえ……さすが一人暮らし」

何か関心したようにモノを物色する真山。

「ボロアパートだからギーギーうるさいけど、我慢しなよ」
呆れてそれだけ言った。

大学進学と同時に実家を離れてアパートに一人暮らし。俺の家から親の家まで3駅分しか変わらない場所。もともと都会暮らしで田舎暮らしではないので、上京なんて言えない。

「何食べたいの？」

「先輩」

「カレー？ ん、分かった。そっち座って少し漫画でも見てな。すぐ持ってくるから」

「先輩話し聞いてた？」

「聞いてた聞いてた」

いつものお世辞にも笑えない真山のギャグを軽くスルーして、俺は真山にメールを返信した直後に作り出したカレーが入ってる鍋に火をかけた。

完成状態。

「先輩、俺のカツカレーにして。ロースで」

「分かった、普通のカレーな」

「話しきけて」

「無茶言うな。そんな肉買う金あるなら苦労はしてない。それに俺、ヒレ派だし」

コイツは貧乏大学生一人暮らしのお財布事情を舐めてる。親の資金援助は何だか自分が惨めに思えてやめてもらって、それからはバイトと大学を往復する毎日。

今日だって夜からコンビニの深夜バイトがある。

ボコボコと空気が抜けて表面に穴の開いたカレーを混ぜて、火を止めてからご飯を盛った皿に豪快にカレーのルーを注ぎ込む。さっきから漂ってきたスパイスの匂いが、より濃い匂いとなって鼻へと流れていく。さすが俺の得意料理。

めっちゃくちゃ良い匂い。カレーなんてほとんど同じ匂いか？

「ホラ、食べろ」

「どーも」

漫画も読まずテーブルの上に手をつき、手の平にアゴを乗つけて俺をただジーツとがん見していた真山の目の前にカレーライスの入った皿とスプーンと麦茶を出した。

今時珍しく目の前で手を合わせ律儀にも『いただきます』と挨拶した真山に、俺の口からは笑みが漏れた。

男らしく豪快にガツンとカレーに食いつく。

「うまい」

「そりゃどーも」

軽く、どうでもいいような挨拶をして、それでも手料理を美味いと言って食べてもらえるのは嬉しいので、俺はそのまま真山を見ながら少し笑っていた。

食べ終わると、真山はまた手を合わせ『ご馳走様でした』と挨拶をする。米3杯も食いやがって、本当にご馳走された。

「少しは遠慮しろよ……俺一人暮らしなんだぞ。米一粒でも大事なんだ」

「あー、すみません」

謝る気ないだろ。

謝罪の気持ちのカケラもない謝罪に、カラになった皿を台所に下げに行きながら、ついたため息を吐いてしまった。

カレールーのついた皿とスプーンを洗い、水を拭いてから食器棚に戻し、俺はもう一度真山のいる居間に戻ってきた。

向かいに座り込み、テーブルに手をつきながら真山に話しかける。

「ていうかさー、真山はいい加減恋人の一人でも作りな。俺の作った飯美味そうに食って貰うのはそりゃ嬉しいけどさ、いつまでもこんな状態じゃ駄目だろ?」

「こんな状態って?」

「お前が男の俺を好きって状態だよ」

俺の真山の関係は微妙だ。

つい2ヶ月ほど前までは普通だったけれど、コイツがいきなり俺に告白してきた時に、コレほどまでに微妙な関係になってしまった。「俺は男の趣味は無いから無理……ってコレ何回も言ってるよな?」「だから、趣味を俺にすればいいだけでしょ。男なんて範囲広すぎ。他に興味持たれたら俺嫉妬しちゃうし、俺だけ見てればいいって」

「アホ、どんな趣味だ……」

「良い趣味じゃん」

「悪趣味だ」

真山の告白はちゃんと断った筈なんだ。『俺は男に興味は無い』と、そしたらアイツは俺に次々無理難題を押し付けてきて、諦める傾向がまったく見つからない。

俺も俺だ。突き放せば良いものの、コイツといると楽しいからって、避ける事をまったくしていないし、こうやって普通に家に入れている。

「俺、お前とチューしてるとこなんて想像出来ねえわ……」

「想像? もうキスはしたよ、先輩寝てる時」

「寝込み襲うなよ、卑怯な奴だなホント」

済んだチューは流すとして。それより上級者向けのDチューとか、セックスとか……男のセックスってどうやんだ? ……まあ、そういうマジで恋人がやるようなことは、想像が出来ない。

「『ホモまどか』」

意地悪ったらしく下唇を突き出し、下の名前でそう言った。神秘的に耳がピクリと動く。本当、どうなってんだろうな、耳ん中。

「ホモってのは別にいいけど、殺すぞ先輩」

「お前それ自分がホモって認めてんのか」

「先輩が好きなんだ。別にホモでいい」

「ふーん……」

俺ってどんだけコイツに愛されてんだ。そしてコイツはどんだけ俺が好きなんだよ。

「ねー、お試し期間も駄目? 3年」

通販も規格外の期間だった。

「それもうお試ししてないだろ」

「んじゃ2年でもいいや」

とりあえず、コイツの出す提案は全部が全部規格外すぎる。

「単位を改めろ。改めても俺はその提案には乗らないけどな」

「一人勝手すぎる」

「そりゃお前もだろ」

可哀想な顔をしながら俺からその顔を逸らしてそう言われて、さすがの俺でも少しイラ付いてしまった。アゴを乗せてる手に自然と力が入る。

「ていうか先輩のその告白の断り方、……アレ全然納得出来ないんだよね」

急に冷静で大人びた顔をして俺を見た真山に、少し驚いてしまった。

「？」

「男だから駄目だとか、趣味じゃないから駄目だとかさ」

「……そうか？」

「うん。だから俺、先輩が俺の納得出来る理由で無理って言うまで、先輩のこと好きでいる」

納得できる理由？ 充分納得できるじゃん。

俺は男で、お前も男。お前は俺が好きだけど、俺は男は好きじゃない。ただそれだけのこと。

「納得できないかなー？」

「出来なさすぎ。もし他の人が納得したとしても、俺は納得しません出来ません。」

「それ単に諦め悪いだけじゃないの？」

「そーかも知れないけど、無理」

「……なんだかなー」

確かに俺は真山が好きだ。けどそれは恋愛を意としての好きじゃなくて、一後輩として、一友達として好きだってことで。多分それ以

上の好きにはならないだろうと思う。

ていうかまず、男を好きになるってのが無理だ。俺はホモでもなくただのノーマル。

別にそういう同性が好きな奴を否定はしないし、腐男子ってわけでもないけど……。まあそこら辺はいろいろと複雑だ。

そんなノーマルな俺が男を好きになるか？

別にそこまで恋に飢えてるわけじゃない。女とも人並みに経験はあるし、付き合ったりもしたことあるし、欲求不満でもない。

ていうか、今のいままで真山に好きって言われるまで、男とどうのこうのなるって事を考えてなかったから、今相当焦ってる。

……どうしたらいいものか。

「真山は、俺とどうなりたいの？」

「付き合いたい」

「デートは？」

「したいなあ」

「最終的段階は？」

「同意の上での甘々セックスかなあ」

最終的には俺とセックスがしたいのか……この物好き。真山とチユーするところ想像できないって言ったけど、セックスの方が想像できない……。

まあ想像できなくてもやったらイヤでもどういうものか味わえるしな。

「付き合うのは無理だけど、セックスならいいぞ」

男同士のセックスと言う興味本位と、諦めてもらえと言う気持ち。俺は軽々しく真山にそう言っていた。

「……ん？」

「最後にしたいことってのはそれは俺と一番やりたいって事なんだろう？ だから、それをやればもう俺の事は諦めて忘れられるだろうし。……だって最終目標達成するからさ。ホラ、俺がいいってんだから『同意セックス』」

「……甘々は？」

「こんなもんだろ男同士なら」

男同士だから下手なムード作らなくてもいいし。男同士で甘い囁き？ 好きとか、大好きとか、愛してるとか？ なんか嫌だし。

……想像したら気持ち悪いな。ていうか俺真山のこと好きじゃないからコレは無いか。

「どうする？ それで満足出来るなら体、1回くらいなら貸せるけど」

「先輩俺のことバカにしてる？」
してねえよ。

「俺は至って真面目だぞ」

「それ以上言ったら、俺、ガチで先輩の事殺すよ」

「……は？」

マジな顔で睨まれたのが良く分かった。それでも、コイツの顔はいつもガン付いている顔だから、それほど怖くは思えない。

「俺はマジで先輩が好きなの。好きな奴からそんな軽い事言われて、ムカつかないわけじゃないじゃん」

確かに、コレを好きな女の子から言われたらショックはでかい。

自分なんてどうも思われていないって実感して、内心悲しくなるな。

「ごめん」

ここは素直に謝っておいた。

「今日はもう帰る」

「そうか」

「先輩はもっと俺を警戒した方がいいですよ」

立ち上がりながら、そう言う真山。意味が良く分からなかった。きょとんとした顔をしていると、ふいにクスッと笑われた。

「意味、分かりません？」

「ああ、……うん」

「俺は先輩と同じ同性だけど、先輩を男の目で見てる。先輩は俺にとって恋愛対象だ。……女と違って少しは耐久性もある。……あん

まり『1回だけならいいぞ』とか言っているなら。監禁しますよ」

「か……監禁だあ？」

犯罪だぞ。

「やりまくって先輩の事壊すかも」

「……っこわ」

「俺はいつも先輩をそんな目で見ているんですよ」

笑いながら、平然とそんな事を言う。……あまりにも説得力がなさすぎて焦ってしまった。……けれどアイツは俺に嘘はあんまり吐かない。

「カレーごちそう様。じゃね、先輩」

「ん？ うん」

玄関でスニーカーを履く真山。俺に見向きもせず、開閉の時にいつもギギイと音を鳴らすドアを開き、出て行った。

真山の消えたそのドアは、またギギイッと音を立ててガチャリと部屋を閉じる。

「……」

コレは少し、真剣に考えた方がいいのかもしれないと、今日初めて実感した俺だった。

俺の先輩、俺と後輩（後書き）

仲佐の時もそーだったけど、
年下の性格ってやっぱりちよつと天然だったり、
変な感じに想像してしまふ・・

NEXT↓ サンタの日

サンタの日（前書き）

仲直りしてお友達になる話し
腐要素少なめ、なんか全体的に暗いです

サンタの日

起きろって言われた気もしたけれど、それはアクマで気がしただけだから、無視した。

それでも俺はアレ？ おかしいなー。なんて思いながら、俺のさっきまでの行動を回想してみる。

「あー、もういいかなー」

いきなりやる気が無くなるって事は、誰しも必ず持ち合わせている病気みたいなものだと思う。よし今日は勉強しよう、って言って、参考書開いていよいよペンを持った時にいきなりやる気が失せたり、腹減ったけど作るの面倒くさいから食べなくていいやとか。

さっきの俺も多分そんな感じ。

なんであんな事しようとしたの？ って聞かれたら。

「あー、もういいかなー。いい加減」

とか、なんかそんな返答をするだろう。だって本当にそんな理由だったから、そう返す以外何も無いわけだし。真面目に答えろって言われても、これが最大の真面目な答え――！。

「起きろ」

「あでっ……！」

目をつぶって、アレ？ おかしいなー。なんて思っていたら、額に痛みが走った。別にそんな痛い言う程の痛みなんかじゃなかったけど、反射的に、痛いと言口にした。

目を開くと、まあここは絶対天国じゃないな、とは思った。見た事は一度も無い家。綺麗に片付いてはいるけれど、お世辞にも天国なんて呼べる場所じゃない。暗く濁った色をしている壁。風で部屋全体がギシギシと音を立てている。それに何かヤニ臭い。

「なー、……ここどこ？」

さっきとは打って変わって、温かい空気が体を包みこむ。少し残念だと思いながら、俺は軽い口調で質問した。

「俺の家」

「ちげーって、ここの住所だよ住所」

「下河」

「どこだよ」

「お前ん家の3つ先の駅近く」

「ああー、あそこか……。……ってなんで俺の家知ってんだよ」

気持ちわりいと悪態をつくど、そいつはバツが悪そうに黙り込んでしまった。

そんな光景に溜め息をして、それから着ていたであろうコートを探そうと立ち上がる。半ば放り投げた感じで放置されているコートを見つけ、それを着ていると、いきなり呼び止められた。

「へ？ どこ行くて、帰るんだけど」

こんなところ、いつまでも居られない。それに携帯も持ってきていないみたいだし。

「てめえどうやって帰んだよ？」

どうやって帰るんだ？ と聞かれて、こいつホントに頭悪いんじゃないかと言う疑惑が確信に変わりそうになった。

「どうやってって、電車乗ってに決まってんじゃねえか。定期は辛うじてもってきてるし普通に……」

ふいに見た、壁にかかっている時計と、その奥のカーテンの閉まっっていない窓を見て、一瞬だけフリーズした。

それからもう一度確認して、疑惑が確信に変わった。

「電車もう無えじゃん……っ！」

時刻は3時。窓の先の向こう外は真っ黒。

馬鹿は俺だった。

「どうしようかなー」

まあそう思ったのはほんの少しで、無駄に前向きにこれからどうしようと、途中まで着ていたコートをもっかい着始める。

「ああ？ てめえマジで帰んのかよ」

すこしビックリしたようにそいつが聞いてきた。

「あつたりめえじゃん。なんでテメエのいるとこにいつまでも居なきゃいけないの。てか何で俺、今ここにいんの？」

さっきまでの行動を回想していても、俺がいつここに来たか全然分からない。その大事な部分だけスパッと記憶に無い。それはつまり、俺が本当に忘れているか、誰かが意図的にここに連れて来たしかないと解釈した。

「俺が連れてきたからに決まってんだろ」

答えを待っていてると、そうきっぱり言ってきて、ですよねー。と思った。

なんであんなひと気の無いところにコイツが現れたのかは分からないが、なるほど。たった一部だけど、謎が解けた。

そんで思う。だから口にしてみた。

「いらん世話焼くな」

「……」

おまけに怨むように睨みまで加えてやれば、俺のイメージが一変して最悪なものになるだろう。あんな事をしていて、そんでこの台詞にこの態度。

「じゃ、俺行くから」

この時間じゃもうまったく役にも立たない電車の定期券を、失くさないようにコートのポケットに突っ込んだ。

それからお礼も言わずに出て行こうとドアへと直行。

「どうやって帰んだよ？」

「タクシーとか」

こんな時間で電車もバスも無い。ていうか、タクシーに乗って帰ろうとも思ったけれど、よく考えてみれば、少し街道に出ないと、こんな住宅街にはタクシーなんて無いだろう。

しかも、今日は一段と外が吹雪いている。冬將軍が必殺仕事人中だ。

「金は？」

「ねえよ。家ついたら払うつもりだけど……それが？」

「てめえほんとに家に帰んのか？」

「何に疑ってつか分かんねえつつの。そんなに言うならタクシー会社に電話してタクシー呼べって」

「電話番号しらねえ」

「使えねえ奴……」

まあ、じゃあ最後選ばれる選択肢は街道まで歩いてタクシー見つけて家に直行。ってのだけ。俺はもっかいだけじゃあな、と口にし、靴を履こうと玄関へと向かった。

「てめえ、今日はここいろ」

「はあ？ 嫌に決まってるだろ。てかこっち来んな」

立ち上がりこちらに向かってくるそいつに、そう言った。いつまでもいつまでもお礼も謝意のカケラもない態度に、そろそろ殴られるかな、とか思ってたなら、家と外とを繋ぐドアノブを開けないように掴んで。

「俺のせいかな」

なんて、そんな事を聞いてきた。

「は？」

「だから、テメエがあんな事してたの、……俺のせいかな」

アレが、お前のせい？ なーんて、どんな脳みそしてんだ。

「俺がテメエでどーにかなるわけねだろ」

「じゃあ何であんな事してた？」

逆にそいつに睨まれて、俺はイラッと来る。

俺が何をしてようがコイツには関係ない。だって他人だし、俺は友達なんて思った事も無いわけだし。ていうかもう慣れて、俺の中のお前の存在なんてアリくらいだって。

「俺のせいじゃないなら、元から自殺志願者か」

「……」

「テメエ、さっき、なんで死のうとしてた？」

「別に、死のうとしてたワケじゃねえよ」

「じゃあ何なんだ」

＊

「明日取りに行く予定だったんだけど、明日吹雪くらしいから今日注文しといたの。取りに行ってきたくれない？」

母親がケーキ屋に頼んだクリスマスケーキを取りに行く、そんなおつかいみたいな事を頼まれた。ケーキ屋と言っても、それは母親の知り合いパティシエが経営しているお店で、俺等はいつもコネで無料だ。無料と書いてタダ。

無料タダの店でも、俺は金よりも何よりも、一番取られたくないモノをそのパティシエに取られた。

半年も前の俺の誕生日。帰宅した時に、聞こえた母親のあの甘い声。二階の寝室から聞こえてきて、まあ人間なら仕方ないか、と普通に部屋を素通りして自分の部屋に戻ろうとした時に見えた。

自分で見に行ったんじゃない。見えたんだ。そのパティシエと俺の母親がセックスしてるのが。

親父が昔から不倫しているのは知っていた。だから母さんの事を可哀想に、なんて思って、2人で喧嘩を始めた時には、母さんの肩を持つようになっていた。

『ハッピーバースデー』

その日の誕生日ケーキは、苦かった。

――まさか母さんもか。

一番取られたくないモノを取られた時の感想。

随分あっさりとした感想なんだな、って、自分でも思った。でもこれがその感想だったんだから、しょうがない。

だからって俺がどうこうできるような立場じゃないから。バラして家庭崩壊させたいとは思わないし、むしろいままでこの状態で上手くやって来たんならコレでいいのかもしれない。

いつも通り。

ただ少し俺が我慢すればいいだけの事だ。何を我慢するの？ と聞かれれば、返答に困ってしまう。だから敢て考えないようにした。それからだ、俺の何かがおかしい。母さんと父さんと、……それ

に何か、人を見る目もおかしい。鏡を通して自分を映して見れば、俺すらもおかしい。

母さんと父さんは妖怪みたいな化け物で、それに群がる不倫相手やそのパティシエは、発情期の猿に見えた。人間元から猿なんだから当たり前だ。なんて思っていたら、案の定、全員同じような猿顔に見えてきた。

気持ち悪いから少しの間引きこもろうと思ったら、エプロンつけた化け物が、俺の部屋をドンドン叩いて引きずり殺そうとしてくるし、学校に行けばゴリラみたいな奴に虐められるし。辺り見回せばそこら中でキーキー奇声を上げて、パンパンパン頭の上で手を叩いて爆笑している。それに陰口を言い合いメガネ猿とか。もう本当に、猿の惑星。

だからってそいつらを避けるわけにはいかない。だって、鏡を見れば俺もそいつらと何等かわらないモノだったから。

本当、俺の目も脳も思考もどうしちまったんだ。……とか思いながら、今日この日まで来た。

「よう、待ったか？ ケーキ出来てるぞお」

店内に入って店員さんに注文したケーキの事を伝えて客用の椅子に座っていると、厨房奥から母親の不倫相手が出てきた。

「ほんとに母さんに似てきたなあっ！」

鼻の下の伸びた顔に、ついつい顔が歪む。

「オジサン。ケーキは？」

「お、おう。コレだっ。どうだ？ 母さん元気か？」

息子の俺に聞くくらいなら母さんに電話すればいいと思った。俺に優しく接したって、多分母さんは離婚する気なんか無いと思うし。するだけ無駄。そう教えたいけど、何言われるか分からない。告げ口されて母さんとの関係もややこしくなりたくもない。

「元気だよ。今買い物行ってる。クリスマス用の。……じゃ、俺行くから。ケーキありがとう」

きっと今回も苦いであろうケーキが入った箱を、大事に大事に抱

えて、俺は店を出た。辺りはスツカリ暗くなっていて、それでも時間はまだまだ夕方。

電車の揺れも気にしつつ、歩くときも慎重に持ちながら、自分の家の玄関を通り抜けた。母さんも父さんもまだ帰ってきてなくて、微かに二人の匂いがする。

二人と言うのは、勿論母さんと父さんの事だけど、実質、その二人の匂いは互いの不倫相手の匂いだから、本当の匂いじゃ無いだろうが。

「……」

雪みたいな白い箱から、ケーキを取り出してみた。

『ハッピーメリークリスマス』

幸せに、キリストを祝ってやがる。

最後はお経読まれて十字架じゃなく墓石の下に埋まるヤツ等が何故にキリストを祝わにゃいかんとか、そう思ったが、それ以上に。

父さんがコレを笑いながら食べるのかと思うと、すこしだけ吐き気がした。

きっと父さんはこう言うだろう。

「甘くて美味しいね」

苦くて不味いものを甘くて美味しいと言う。誕生日の日のケーキは、俺にはお世辞にも美味しいとは言えない味だった。

「つらいな」

いろんな事がつらくて、俺はふいに家を出てみた。そんな飛び出した、なんて言葉は使えないくらい、ゆっくり、いつも通り。行く宛ても目標先もないのに、フラフラとそこら辺を歩き回った。

なんでつらいの？ って聞かれたら。

「だって、居場所がない」

って返す。

なんで居場所がないの？ って聞かれたら。

「両親には別々に想う人が居て、学校ではサンドバック並の扱いだから」

って説明する。

だから？　って聞かれたら。

「明日に行くのが怖い」

って、馬鹿な弱さを晒すだろう。

どんだけ歩いたか分からなかったけど、天気がどんどん悪くなってきたなんてのは、肌で感じていた。

寒すぎて、時間さえも気にならなくなった。足と皮膚が痛いってのだけ分かる。とうとう物の感覚さえなくなって、その場に転んだ。最初は起き上がろうとしたけれど、それもすぐに止めた。

「何で死のうとしてた？」

別に、死のうとしてたんじゃないよ。

「じゃあ何なんだ」

「あー、もういいかなー。いい加減、……なーんて。」

そんな風に思ったから、と、俺は目の前のソイツに返答してみた。片方の眉がピクリと動いて、ふざけてんのか？　みたいな顔をする。ふざけてんじゃねえんだよ、本当に。だからいらねえ世話焼くなって言っただろ。

「ていうか、お前。いつも俺に言ってんじゃん。死ね死ねって、気持ち悪いくらいに」

言葉の重みさえも知らずに。

「何かに取り憑かれたみてえにさ。……でもだからってお前のせいじゃない。さっきも言ったしよ」

何気のフォロー。

「自分が死ねって言うてる相手が死にそうになってるのを助けちゃあさ、それは、矛盾すぎるだろ」

「俺の死ねってのは……その、挨拶みてえな……」

「へえ、……それって言い訳？」

面白くてついそうやってきつく言ってみると、そいつが黙るのが分かった。……本当に面白いなコイツ。面白いので、もっと意地悪してやろうと思った。

「じゃ、俺これからもつかい死に行くか。じゃあな」

笑いながら手を上げて、じゃあな。と口にする。目を見開いた、離っていたドアノブをまたきつく握りしめた。

何なんだ。

「人が死ぬのが嫌なら、死ねなんて口にすんな」

説教したら、シュンと縮まった。本当に、俺をパンチ練習台にしていたのが嘘のような格好だ。場の逆転って言うか。なんか気持ち悪い。

「……っどうでもいいから、今日はここ泊まってけ」

「や、それは本当に嫌なんだって。俺お前の事嫌いだから」

「うっせえな、俺もだよ」

あーそうですか。

「じゃあいいじゃねーか。どけよそこ」

中々どかないので、頭とかチョップしたり思い切り殴ったり蹴ったりしている、器用にドアノブにチェーンをつけて、俺の腕をぐいっと引っ張った。

「……離せっつのっ！」

「黙れっ！」

それから、さっきまで俺が寝ていた布団に投げられた。

「ココ居ろ」

「はぁ……なんなんだテメェ」

とりあえず、布団に投げられた俺の頭上からふりかかってくる殺気がうざい。俺が幾ら何度ドアに向かったって、こいつは何故か阻止しまくるだろうと思って、一先ずは諦める。

「ったく、…学校じゃウハウホ言いながら俺の事散々殴ってるクセによお」

下僕みたいな小猿に、顔は止めろつつって体ばっか狙わせやがったり。足蹴られた時は痛すぎて引きずりながら帰ったりしたっての。

「中途半端にやられんのが一番嫌なんだよ。嫌がらせかっ！」

「いじめ何だから嫌がらせだろうが。アホか」

「……」

正論言われて黙っちまう俺のアホっ。

「つうかテメエ、何であそこに居た？」

あそことは、一体どこのことだろうか。凝視して首を傾けていると、何故かイライラしながらソイツが言った。

「テメエが倒れてたとこだよ」

俺が倒れてたところ。……て、言われても、場所はドコだから分からない。なんせ本当にフラフラと歩いていただけだから。あそこの曲がり角曲がろうとか、ここ真っ直ぐ行こうとか。とりあえず本当に適当に歩いていた。

最終的には迷子状態で意識手放したり。だから、自分が一体どこに居たのかは、さっぱり分からない。

「俺ドコにいた？」

「は？ マジで言ってるのかそれ」

「ただ歩いてただけなんだって。何時間も歩いた気したけど、数十分な気もするし。どこをどう歩いてどこで倒れたかなんて分かるわけねえじゃん」

なんて俺が悠長に言ったもんだから、ソイツは溜め息を吐いて呆れたように頭を抱えた。

「家の前」

「は？」

「家のまん前にいたんだよ」

「どこの」

「ここに決まってるんだろ馬鹿か」

うわー、めっちゃくちゃミラクル。

いや、……てか。

「気持ち悪い」

なんだそれ、もしかしてコイツ運命感じちゃってる？ ……もうちょっと可愛げのあるヤツにしてくれっての。てか女子だぜ女子。

運命感じちゃうなら女がいい。

「あ？ てめえ助けてやってその態度かよ」

「だーから、誰も助けてなんて言ってるねえっつもの」

「はあ？！ マジでふざけてんじゃねえぞテメェっ！」

大声を出していきなり俺の胸倉を掴んで顔近くに引き寄せてきたから、俺はつい驚いて、目を見開きながら、短く声を発してしまった。

マジでキレてる感じで睨んで来るこいつは、今まで以上に意味がわかんなかった。コレだけ意味不明だと、逆にキレる気力も薄れる。「テメェが俺に助けてつつったんだろ！ 忘れたってんじゃねえだろうなあっ！？」

……。

え、…俺、そんな事言っただけ？ ケーキ貰って戻ってきて、家出て、歩いて、倒れて……コイツに世話焼かれて……。

いや、ていうか拾われる時にもそんな会話する意識はあったとか、そんな事すら記憶に無い。

「ごめん、分っかんねえ」

とりあえず、忘れた事には早々と謝っておこう。まあ殴られるかもしれないけど、それはいつもの事だからしょうがないとして……。

「お前、俺が助けてって言ったから助けたのか？」

「……」

眉間のシワが尋常じゃないですよゴリラさん。

「あー…いや、忘れちゃったのはごめん。っいやでも、俺、お前にそんな事言っただ事ねえだろ？ お互い嫌いなのは今までので充分分かってるし、助けても俺がお前に感謝の一つもしない事くらい分かるじゃねえか」

まさか助けられたくらいでお前に従順になるわけでもないし。

「お前、良くわかんねえぞ」

「そりゃこっちの台詞だ」

おかしいと言ったら、俺もおかしいと帰された。

「つうか、お前の嫌いと俺の嫌いを一緒にすんな」

「……？」

「嫌いは嫌いでも、意味合いが違え」

そんな事を急に言われたもんだから、ますますおかしい。それでいて意味わからねえ。

「まーいや。」

でも実際、んなことどうでもいい。

「てかお前、親どこだよ？　こんな深夜に一人か」

「てめえに関係ねーだろ」

「……帰る」

無表情でそう言うと、頭を掻きながらそいつが舌打ちした。……

黙って追い出しとけばいいのに。なんて思ったのは言わないで置く。

「お袋がこないだ離婚して家でて、今父子家庭。親父は今女んとこ。多分2日3日帰ってこねえ」

「……」

こんな季節だしな、と嘆息して、俺を見る。そういえば俺も、母親にその愛人の作ったクリスマスケーキを取りに行かされた。

「なんか……」

コイツ、俺より酷え。家庭状況は、俺より悪化していた。

「なんか、…なんだよ？」

「あ、いや。なんでも無い……」

似ていると言うよりは、規模が違う。俺はまだ離婚でところまで行っていないんだから。

「なあ、おい。なんで離婚した？」

普通の人相手には絶対に聞けないような質問をした。不謹慎だとか、失礼だとか、……でも俺はコイツが嫌いだから。

それに何か、理由は今の俺の家庭状況と一緒に気がした。

「浮気。2人とも愛人作って終わり」

両手を広げて、あっけ無えと訴えるように、そう言った。別に気を悪くした様子も無く、コイツは俺とは違う感性を持っていると、そう思った。

自分の親が互いに違う好きな人を作っている。それでも家ではま
るでお前しか居ない、見たいな感じに笑い合ってる。俺が居るとき
は尚更だ。そんな、互いに気持ちを偽造をしているのを知っている
からこそ、俺はいつも気持ち悪いってのに。

映る景色が変わってしまう程に。

でも、コイツは俺の行く末の先に居るのに、こんな淡々としてい
るのは何でなんだろうか。親がどうだろうが別に興味が無いって事
は無いだろう。一応自分の産みの親なんだから。じゃあなんだ。慣
れ？ ……慣れるものなんだろうか。

「お前なんでそんなあつさりしてんの」

出来る事なら、俺もそうになりたい。早くこの景色からも、この気
持ちからおさらばしたい。

「なんでって、そりゃあ——」

「とつくに諦めてるからだろ」

「それに、俺の場合」

「もう終わってる」

「済んだ事は、それはそれだろ？」

そうあつけなく答えた。

俺も充分諦めたつもりだったんだけど、そう淡々と出来る理由
が諦める事であるならば、俺はまだ、どこかで希望でも抱いている
んだろうか。

小さくそう願っているんだろうか。

「どうしたら諦めきれる？」

「は？」

「きっぱり諦めるには、どうしたらいい？」

俺の諦めが不十分だとしたら、教えてくれるのは、今日の前にい
るこいつしかいなかった。

「お前はもうやって諦めた？」

そう、目の前にいるゴリラに聞いた。

ゴリラはいきなりの質問攻めに少しだけ目を見開き、それから言

つてもいいのか、と言う風に俺を見て目を細めた。

「お前」

呟いた言葉は、意味が全く分からなかった。

「お前だ」

「俺？」

「ああ、……サンドバック」

「……あ」

つまり、結論から言うところ。

俺を殴って蹴って、それを見ながらやりながらストレス発散していたという事か。……俺はお前の身代わりかよ。

「まさかと思うけど、」

何かに気付いたように、俺を凝視した。

「いや、……てめえもか」

「お前が俺で諦められたんなら、次は俺がお前で諦める番だよな」
明確な答えは言わなかった。その代わりに笑みを浮かべてみる。
苛付きか、腹いせか、復讐か。多分今はそんな子供みたいな理由。
そんな理由で、俺はそいつの胸倉を掴み、右手をグーにした。

力を込め、振り下ろす。無意識に目を閉じたそいつの頬と俺の拳がぶつかった時に、バキッとそれに似つかわしいような音を立てて、重い感覚がした。簡単に殴られてくれたそいつは、俺とは違って余裕そうな顔を浮かべていた。

「一応聞くけど、親が化け物みたいに見えたり、自分と他人が猿とかそんな風な……人間以外に見えたり感じたりしたことは？」

「あ？　ねえよ」

もう1発殴った。

「俺だけかよ、ふざけんな」

「おい、殴っていいぞ」

胸倉を離そうとしたときに、そいつがそんなMな事を言った。別にそんな意味は無いんだろうけど。

「俺が死なない程度に、氣い済むまで殴れ。ま、それじゃ死ねねえ」

だろうけどな」

許しと挑発。そいつがそう言うので、俺はそれから数十分の間にそいつを殴りまくった。息も切れて、手も痺れている。鼻血を寮鼻から出して布団に体を投げているそいつが、一瞬だけ人間に見えて、びっくりした。

サンドバック効果ってのは結構凄いらしい。

「終わり。気、済んだ」

「……そうか」

相手がコイツだと言う事は気に入らないけれど、久しぶりに人の顔が見れて、それでも、見れた事が何より嬉しかった。

「てめえ、ダチ居るっけか」

ふいにそいつが、面倒臭そうに鼻血を放ったらかしにしながら、俺に聞いてくる。

「いねえよ、……お前のせいだろが」

鼻血が皮膚を伝って、布団に染みた。

「ああ、そうか。……じゃ、俺この関係やめるわ」

「はあ？ どの関係だ」

「いじめどーのこーのの関係だアホ。」

いじめどーのこーのって事は、俺とコイツの対峙関係の事なんだろうか。アイツがいじめっ子で、……俺がいじめられっ子？

「なあ、……俺もっとお前の事怖がった方がいいわけ？」

「……確かにてめえはいじめられっ子にしちゃあキャラが変だ」

「や、てめえに言われる筋合いは無え。でもやっぱおかしいよな……」

第一、ゴリラを怖がれて方がおかしいんだけど、それは俺の見える世界がそうなのであって、こいつ等の世界は普通だから、結果的に俺がおかしい。

「いや、まで。そう言う事じゃねえよ」

「は？ じゃ、どう事だよ」

ていうか何の話してたっけ。ああ、そうそう対峙関係があれこ

れと……。

「あー、つまり。……てめえのダチになってやる」

「断る」

とりあえず、反射的に断っておいた。

「おま……っお……いコラ、良い度胸してんじゃねえーか……ああ？」
俺の拒否に逆ギレ。

もしかして今の話しに拒否権は無いんだとしたら、それは対峙関係をやめるって事のつながりにはならない。だって、友達関係に拒否権の無い強制とか無えもん。多分。

「俺、お前嫌いだから無理」

「だからそりゃ俺もだって……」

「んじゃ今の関係を反対にしよう。今日から俺がいじめっ子で、お前がいじめられっ子。どう？」

胸倉を捕まれていたので、俺は自分の手をグーにして軽くそいつの頬にくっつけてやった。

「話を聞けっつの。お前、きっぱり諦めてえんだろ？」

「うん、だからお前の事殴んの」

効果はさつききちんと見たし、後はコイツを殴りまくれば……。

「殴るより、効果あんだよ」

その一言に、俺の意識は集中した。

「ダチ効果。」

「……」

まず最初に思ったことは、胡散臭い……ってのと、……まあ良い印象は持てなかった。だけど効果があるか無いかなんて、俺に分かるわけが無くて、有無確認が出来ない。

「そりゃ、マジか？ デマか？」

「マジだ。だから俺がてめえのダチになってやる」

胸倉捕まれてそんな事言われたって困るだけだ。ていうか、……友達になるにも、もっと他の人が良い……いや、でもこの際そんなワガママいってらんねえか？

こいつのせいで、俺は多分、友達なんて作れるなんて環境は当然巡ってこないだろう。つるんだら俺も虐められる……みたいな、そんな感じで。

「……」

じゃあ、コイツしかいないじゃん。

「でもよ……嫌いなのに友達ってのもおかしくね？」

「流行りだ」

そんな流行りねえよ。……いや多分。中学までは普通に友達だったし、でも嫌いな奴とはつるんでなかったから、この状況は良く分からない。

もし今コイツの言っている事が本当ならば、俺は嫌いなコイツと友達になりたい。

「友達なったとして……何すんの」

「とりあえず、……明日……つーか今日は一緒に行動だな」

「はあ？ なんつでだよ？！ 彼カノかつ！」

一緒に行動で……友達とそこまでした事なんてねえよ。お祝い事なんて面倒臭くて何か用事見つけて断ってたし。

「家で、親と一緒に居るよかいだろが」

……正論でしたっ。

「んん……分かったよ」

「ダチ、なんのか」

「友達だろ？ 友達な。友達だ」

渋々と承諾。適当で意味の分からないヤリトリだとは思ったが、要は友達になったわけだ。……ていうか、友達の癖に、俺は重要な事が分からなかった。

「な……お前、名前なんてえの？」

「……」

「名無しさんですか。あーそー」

「ひでおだ。英雄えいゆうて書いて英雄ひでお」

なんていうか、普通の名前だった。ていうかエイユウさんが何ヒ

ト虐めてんだよ……。

「ひでお、な。……てか、そっちは俺の名前知ってんの？」

「知ってるっつの、お前の嫌いと俺の嫌いを一緒にすんなった
だろ」

言ってる意味は分からなかった。

「ハル」

「……当たり」

サンタの日。朝一で家に帰り、連絡も寄こさず朝帰りしたという
事を怒られた。謝りながらも、ほんのちよつとだけ化け物っぽい姿
から離れたと言う事に少しだけ感動を覚えた。

その年のサンタの日は、偽の愛を振り撒く二人から離れ、ヒデオ
の家で過ごした。クリスマスって事を祝うと言うよりは、俺等のこ
れからの不安定な関係を心配したり。

コンビニで買ったやつすいケーキは、ほんの少しだけ、甘かった。

サンタの日（後書き）

いじめっ子×いじめられっ子書こうとしたら、いじめられっ子が全然いじめられっ子じゃない・・・

まあこんなのも有りかな、て思いました。
続く・・・かも？

NEXT ↓悪い奴

悪い奴（前書き）

悪い奴と、その話し

悪い奴

恋愛と結婚は別。だから不倫だって出来る。

好きとセックスも別。それだから愛の無いセックスが存在する。

「ややこしいね」

ちょうど妻が昔からの友人宅に泊まりに行っていなかったのので、仕事帰りにバーへ寄り道した。普段ならそんなところ一人ではないが、妻が最近ハマッてるとか言っていたから、少しだけ気になっていた。

とりあえず街に出て、……よく分からなかったから1番最初に入ったところに入った。

開店後なのか、それとも売れてないのか。客は俺以外誰もいなかった。

「いらっしやいませ」

黒い眼鏡と、黒い髪の毛。黒いベストに黒いパンツ。Yシャツには縦線のストライプが模様となっていて、まさにバーテンダー、的な男がいた。

程よい暗さと、落ち着いたジャズ。男とバーの雰囲気もマッチしている。

「どうしますか？」

メニューを渡され、困惑した。カクテルの事は何も知らなかったから、何か美味しい物を、と、適当に注文する。少し間を置いてから了解しました、と静かに声を出したそのバーテンダーは、俺の目の前で手際よくカクテルを作り出した。手際がよすぎて少しだけ圧倒された。だから行程は全く覚えていない。

気付いたときには色鮮やかなスカイブルーが目の前に出されていて、俺はただゆっくりその鮮やかな色をした液体を飲むだけ。

「……うめえ」

チマツとした小さな底に、長い持ち手。少ないその中身をぐいっ

と一口飲んだ。中身はもう半分もない。海見たいに綺麗な青色をしていた。だけど海より何倍も甘い。アルコール分はあんまり感じなかったが、本当に美味しかった。

残りの半分を飲み込むが、やっぱり美味い。

「おい、これと同じの。もつとくれ」

また同じものを頼んだ俺に、バーテンダーは何故か小さく笑いをこぼした。

「お客さん、コレはそんなバンバン飲むものじゃないですよ」

「美味えんだ。だから飲みてえ」

「甘かったでしょ、ソレ。次は少し酸味のあるの作ってあげますよ。お金大丈夫？」

商売やってる癖に金の心配するのか、なんて不思議に思いながらも、俺は財布の中身を確認する。

「10000円しかねえ」

「じゃ、それ以内で作ればいいんですね」

それから、そのバーテンダーは次々にいろんなカクテルを作ってくれた。さっぱりしたのとか、喉の奥が少しピリっとするくらいの辛みのあるカクテルとか。様々な物を作ってくれた。

俺がいちいち酒の種類の名前を気にするような人間では無いと察知したのか、深い説明はされなかったが。ただ美味しいでしょ？と軽い笑みを浮かべるだけ。

綺麗だった。

「なあ、お客さん。あんた、サラリーマン？」

「ああ、営業職だ」

「そりゃ凄いな。疲れねえの？ 毎日毎日暑い中街歩き回って頭下げててさ」

「疲れるが、やり甲斐はある」

「ふーん、お客さんは努力家だね。偉いなあ、なんか売り上げ成績とかあるんだろ？ ドラマでやってるような」

「ん、ああ。ドラマ、……そうだな、そんな感じだ」

サラリーマンをやっていて、お疲れ様。だとか、頑張って、応援してるよ。だとか、そんな言葉を言われる事はしょっちゅうだったけれど、偉いなんて言われたのは初めてだった。

仕事をするのは当たり前。俺はただ当たり前の事をしているだけなのに。それを偉いと口にするこのバーテンダーは、深い真つ黒な目に、俺を映していた。

「なあ、アンタっ―」

「ただいま。店番させちゃってごめんなあ。お客さん、いらっしやい」

俺がバーテンダーに話しかけようとしたら、店の入り口で何やらそんな声がした。顎と鼻の下にヒゲを生やし、サングラスをかけ、シワの無い紺色のベストとズボン、それに合わせたかのような、同じ色の蝶ネクタイ。それに丈の長いソムリエエプロンを付けている。「すみませんねえ、お客さん。気まずかったでしょ？」

「え？ いや、……そんな事は……」

接客なのは分かってるが、バーテンダーから色々話しを振りかけてきていたし、それに会話も弾んでいた。

「わざわざ店番してやってたのに、それは無いですよ店長。早く位置に戻ってください」

「へーへー」

何やらコンビニかどこかで足りない食料でも調達してきたんだろうか。誰もいないフロアでコンビニ袋の中をあさったりしている。

「なあ。また来なよお客さん、サービスするぜー？」

「おいおい。アルバイトの癖に何言ってるんだあ？」

俺に向けて言った筈の言葉に、その店長が声を上げた。

「アルバイトで悪かったですね！ ……ていうか、俺目当てで来る客だっただけだぞ！ ありがたいと思ってくださいよ」

アルバイト。……コイツの本職は別にバーテンダーでも無いってのか？ あんなに美味しい酒を知って、それを作れているのに。

心の底から勿体無いと思った。

「それでもお前未成年だろ？　今日はもういいから、早く帰んなさい」

「未成年っ……?!」

驚いて声を上げた。目の前に居る、真っ黒いバーテンダー服に身を包んだコイツが、未成年だと？　いや、……そう言われてみれば、そんな気もしてくるが。

つまり俺は未成年に酒を作らせたのか。

「そーなんですよコイツ、18歳なの」

若え。俺なんてもう今年で26、四捨五入すれば30だ。

「あ、内緒にしといてくださいよ、お客さん」

グラスを拭きながらそう言うバーテンダーは、言われれば、その笑い顔に、まだ少しだけ幼さが残っているような気もする。

ワックスで軽く整われた髪の毛。かけている眼鏡は少しダサイと思わせるような気もするが、若い奴の今の流行なんて分からないから、今はコレが良いのかもしれない。それでも、……こんな綺麗な目を眼鏡で隠すなんて、それも勿体無い。

「お客さん、どうしました？」

自分の顔をジッと見てる俺に、バーテンダーはまた笑いながら不思議そうに俺を見た。

「いや、……会計……してくれ」

「……はあ」

さっきから思っていたが、このバーテンダーの笑い顔は、なんて綺麗なんだろうか。人それぞれ格好良く、可愛く見えたりする表情やアングルはあるが、笑い顔がこんなに似合う人間はそうそういないだろうと思う。

「7400円になります」

スーツの内ポケットに入った財布を取り出し、1万円をバーテンダーに渡した。

「まいどっ」

手渡しで2600円を返される。

「美味かった。ありがとな」

「……うん」

美味かった。そう言うときバーテンダーが少しだけ頬を染めるのが分かった。大人染みた格好をしていても子供だな。なんて思い、カバンを持って出口へと向かった。

8000円近く無くなってしまったが、久しぶりに良い酒を飲んだ。バーに来たのは久しぶりだが、ココにはまた来たいと思うた。

今日は気分が良い。

バーから出ると、涼しい風が吹き抜けた。

＊

「え、……もう明日まで？」

「うんー、ごめん、……やっぱり駄目だった……？」

「いいよ。久しぶりなんだろ？ 俺の事は気にしないでいいから、ゆっくりして来い」

「なんか優しいねえ、ありがと。お土産買ってくね！」

朝、いつもより早く起きて、コンビニで朝食を買って食べた。それから会社に行き、すぐに街を歩き回り、仕事の間だけはいつもと変わらない時間を過ごした。

10時くらいに家に帰ると、鍵も掛かってるし灯りもついていない。ピカピカ光る家電の留守番は2件溜まっていて、その二つとも妻からだった。

2件目には帰ってきたら電話をくれと言う伝言が残っていたので、こんな遅い時間だから遠慮しようかと思ったけれど、何か事故が起きたりしてるのなら心配なので、妻に連絡をとったら、明日まで友人の家に居たいと言われた。

それを潔く承諾した俺は、もうこんな時間なのにそれを拒否するのは理不尽だし、それに、普段妻が忙しく動いているのを知っていたからだ。だから感謝もしているし、好きだから結婚した。だから大事な存在だ。妻が幸せならおかたはそれでいい。だから○

Kした。

「さて……」

電話は切ったが、明日までどうしようか。

まずは飯だ。……とは言っても、どうするかは大体察しがつく。

「コンビニ……行くか」

飯なんか作れない。料理を作ったのは妻が熱を出して倒れこんだ時の、あの味の無いドロドロのお粥が最後だ。去年の冬だったか……半年以上も前だ。

玄関を出て、鍵を閉める。空腹の体で少しばかり歩き、コンビニの中へ入った。カゴを持ち、弁当とカップ麺と、缶ビール4、5本をソレに入れる。

「酒……」

昨日飲んだカクテルの味はいまだ忘れられない。人間良いモノと一回でも出会えばそれを求めてしまうものだ。……少し物足りないが、それはまあ仕方ないと思った。

深いため息を付きながら何かつまみはないかとしばし店内を物色する。

「あれ、昨日の……お客さん？」

聞き慣れないが、最近聞いた事のある声だった。

「……ああ、アンタ」

昨日のバーテンダー……らしき人物がそこにはいた。パーカーのチャックを半分ばかり明け、腕まくりしている。下はジャージで、昨日とは打って変わってラフな格好だった。髪の毛もセットしていないし、……それでも髪の毛の黒さと、綺麗な目と、それを隠そうとする眼鏡は、昨日のままだった。

「何やってんだ？　こんな遅くに」

「遅く？　……って、まだ10時半だよ」

今時の高校生はこんな時間にも出歩いているのか。まあ、女でもないし。……そんな心配する事でもないか？

「お客さんこそ、何やってんの？　飯買いに来たとか……」と、お

客さんってもしかして酒豪なの？ 昨日も飲んだのに」

「いや、酒には弱いが。……酒は好きなんだ」

ふーん。……と物珍しそうにバーテンダーが俺を下から覗く。

「お客さん、変わってんね」

そうニカツと笑った。幼さの残る笑顔。一瞬、本当に見惚れて固まってしまった。本当に笑顔が似合う人間。

「お客さん？」

「ああ。いや……」

思考がしばし固まっていたのが、急に解けた。黙っていた俺はさぞ変人だろう、なんて思いながら、必死に話題を変えようと話しのネタを探る。

「……お前も弁当か？」

ふいに視界に映ったのは、バーテンダーの持つカゴの中に入った紙パックの飲み物と、カップ麺だった。

「ああ、うん。家、一人でさ。料理とか……あんまりした事ないんだよね」

今は家に誰もいないのか。……まあ、なんと言うか、俺とそっくりだな。

「俺も今家に誰もいねえんだ」

「へえ……そりゃあ……」

バーテンダーがふと俺の左手の薬指を見る。

「……お客さん、嫁さんに逃げられたの？」

何言うかと思ったらそんな……。最近のガキってのは本当に恐ろしい事考えるな。

「アホっ！ 変なこと言うな馬鹿。ダチんところに泊まりに言ってるだ。その間俺は一人なんだよ……ていうか、お前。バーに行かなくていいのか？ 今営業中だろ。バイトは？」

「ああ、今日は休み取らせてもらってるの。明日からまたバシバシ働くよ」

未成年なんだし、誰かにバレたら偉い事になるだろうな。

「無理すんなよ」

「うん。あ、なあなあ。お客さん今家一人なんだろう？俺今から行ってもいい？どうせなら交友でも深めよーぜー？こんなコンビニ飯でも、一人より二人の方が美味しいだろ？」

知らない未成年を家に入れる……ってのは、犯罪にならねえんだろうか。でも男だし、今は家に親もいないんだろうし。それに今は妻もいないし、バーテンダーの言うとおりに、一人より二人のが楽しいだろう。

「いいぞ。俺ん家で飯食うか」

「……っうん！」

そんな俺の返答に何が嬉しかったのか、本当に目を輝かせながら笑ったバーテンダーに、俺はまたも思考を奪われた。

そんなこんなでそれぞれレジで金を払い、それから互いにペチャクチャ喋りながら俺の住むマンションまで歩いてきた。そもそも俺はこのバーテンダーの名前は知らなくて、交友を深めるのにいつまでもお前だとかアンタだとか、バーテンダーって呼び方はおかしいと思い、バーテンダーに名前を聞いた。

「お客さんの名前は？」

人に名前聞くときはまず自分から名乗れ……ってか？

「伊崎だ。伊崎瑛太^{いさき えいた}」

「へー、お客さんすっごいカッコイイ名前だね」

「……名前教えたんだからそのお客さんってのやめろって。……んで、お前は？」

「アオキ」

「……苗字か？下は？」

「下？んー……下。下は良いよ。アオキって呼んで」

下の名前は言いたくない？交友深めるつつったのは自分の癖にか。……いや、もしかしてバーで本名とは違う名前を使ってるのか。……源氏名って言うのか？そういう事をバーでしていたり……って、……バーで源氏名なんか使うのだろうか。

わからんが、まあいい。

「別にいいが、言いづらいな」

「言いやすい発音で良いよ。実際下の名前にしっくりくる感じで呼ばれる事が多いし」

下の名前にしっくりくる感じって……アよりキの低い音になってる感じか？

「ふん……まあいや。入れ」

鍵を開けて、扉を開けて、先にそのバーテンダー……アオキを中に招き入れた。

「お邪魔します」

そう挨拶して、脱いだ靴もきちんと揃える。行儀の良い奴だと少し関心した。廊下を渡り、居間に入る。ワンレポ遅れて俺も居間に入ると、何やら興味有りげに頭をうろちよろさせていた。

「へー、綺麗だなー」

「掃除してくれてるからな」

「部屋じゃなくて、あ、部屋もだけど。奥さんの事」

アオキが指さした先の棚の上に、昔旅行を行ったときにとった俺と妻が映る写真があった。

「……惚れるなよ？」

我ながら臭いセリフだとは思ったが、自分の妻を他人に褒められる事がこんなにも嬉しいとは思わなかった。

「すごい幸せそうだ。……奥さん。知的そうで、優しそうで。……良い人だね。」

良い人。

そこに映る小さな妻を見て、アオキは目を細めた。羨ましそうに、その写真に触れようとしたんだろうか。手がそこに伸びて、だけど目の前で止まった。空を掴み、その手は行き場を失う。

それから少しだけ俯いて、アオキが笑った。悲しそうで、綺麗だった。

それでその一瞬。

「アンタも本当に幸せそうだな。ごちそうさまー」

空気を変えるかのようにわざとらしく俺に手を合わせるアオキに、少しだけムツとする。

「名前で呼べっつの」

ペチッとデコを軽くたたくと、へへ、ってガキ見たいに笑った。

「ちよい待ってろな。すぐ湯沸かすから。どこ座っててもいいぞ」

「ありがと。よろしくです」

カーペットの敷いてある床にベタンと座って、コンビニ袋からカップ麺やらなにやら取り出し、蓋を開けて粉スープやら火薬やらを入れていた。俺はその間にやかんに水を汲み、火にかけてまた居間に戻ってくる。自分の分はやり終わったのか、俺の分も開けて火薬やらを入れていくれて、結構気のきく奴だなと関心した。

「ソファ、座ればいいのに」

「あー。……俺ん家ソファ無いから、逆にぎこち悪いっていうか……」

「ふーん」
そうか、と、俺はそのままソファへ腰を沈め、缶ビールを袋から取り出した。それを見たアオキも何やらアセアセと袋から紙パックのジュースを取り出す。ストローを差し込み、俺の前へ突き出した。

「カンパイ」

「……」

その言葉に、笑みが零れる。缶ビールと紙パックのジュース。プラタブを明け、それにコチッと当てた。そのままグイッと中身を飲み込む。アオキの作った酒ほどではなかったが、中々上手かった。

それから会話は弾みまくった。わざわざ作ったカップ麺も、最後らへんには延びきっていてそれほど美味しいとも感じられず。それでも、美味しかったというか……何て言えばいいのか分かんが。さっきの酒と一緒に。コイツが居たから美味しい。美味しかった。

アオキは子供と大人の境目みたいな感じの奴だった。子供の辛さはどう分かっている、今まさに大人の厳しさを習っているところだろうか。俺の仕事をドラマに例えていたのと同じで、社会の事はま

だ良く分かっていたいなかった。何か教えてやれば苦い顔をしたり、楽しそうな顔をしたりと。

酒も回って、俺はいつもよりかなり饒舌じょうぜつになっていただろう。俺の生い立ちを初め、妻との出会い、妻の事。会社の事や、友達の事。愚痴や思い出ありのままを喋り捲まっていた。それに、男と男という事もあるって、かなりの下なネタや、少しグロっぽい事なども話していたと思われる。相手が未成年だという事を完全に忘れきっていた。

そう、完全に忘れていたのだ。

いつ眠ったのかはよく覚えていない。確か最後にみた空は黒よりも明るくて、紺色だったと思われる。シートと肌が触れ合って、心地良い。少し肌寒い気もしたが、とにかく温かだった。スズメの鳴き声が聞こえ、続いてカラスの声や、ゴミを収集する作業の音などが立て続けに続いた。

「ん……」

俺よりも高くても男の声が聞こえた。俺は何一つ声を発してはいない。不思議だった。一瞬妻とも思ったが、いくら寝起きが低血圧な妻でもこんな低い声を出した事はない。

じゃあ誰か。

そんな事考える余裕も無く眠い。

とりあえず、寝よう。寝直そう。そう思って、ふと寝返りを打ってみた。時々妻は友達と温泉に泊まり行ったりする事はあったので、ダブルのベッドは1人だけじゃ少し広く、割と寂しいものだとなっていた。

それなのに、少しも広くない。寂しくもない。

寝返りを打った先の温かさが、人の体温だという事を知った。伸ばした腕には誰かの肌があって、その感触が余りに柔らかく、素肌という事を知る。

「な……」

重い瞼が、一気に上がった。

カーテンが閉まっていて、少しばかり暗い。それでもはっきり見える。見えた。目の前には俺よりも若い男の顔があって、目を閉じて、キレイに眠っている。

「な…っ」

アオキだ。裸で。同じベッドで。寝ている。アオキが。未成年だ。いや、それよりも…。何でこんなになってんだ。

気付けば、俺も裸だった。

わなわなと怒りが込み上げる。一触即発。

「うん……」

軽い寝言。それが簡単なほどに俺の怒りを爆発させた。

「てめえっ、なにやってんだっ!!」

ダブルベッドは、二人で寝るには丁度良く、それでも何か物足りないって事を俺は知っていた。

布団を剥ぎ、思いきり眠っているアオキの腹を蹴り上げる。衝撃でアオキの体は後方へ飛ばされ、そのままベッドの下へと落ちて行った。ドスンという大きな音と共に、アオキの呻き声が聞こえる。

「いづっ……ぐっ!」

腹を押さえずくまるアオキの髪を、俺は怒りのままに持ち上げた。そのまま顔をぶん殴った。

「がふっ! …っ……!」

「何やってんだテメェっ!」

我を忘れていた。

コレはアレだ。所謂アレだ。^{いわゆる}『不倫』ってやつじゃないだろうか。

状況からして、俺はコイツと、アオキとセックスを…してしまった? んじゃないだろうか。……男と男同士でも不倫になるのか?

カウントされるか? ……いや、体を重ねたのなら男も女も関係ねえ。

そんな事を思って、我を忘れていた。

見下ろす先のアオキは、パンツも穿いてないような真っ裸だった。醜い。なんつー醜い。俺は何て奴とヤッてしまったんだ。ていうか

何でやったんだ。俺はノンケだぞ。それで結婚してんだ。それがちゃんと証明してんだろうが。なんで男とヤッてんだ。

「ごめんね」

呟いた言葉は、謝罪だった。

ごめんで済んだら警察はいらねえんだ。

「ごめんなさい」

だから……。

「大丈夫」

……。

「忘れるから、忘れよ」

アオキが笑ったので、俺はあんぐりした。

「お互い口に出さないで。もう会わないから大丈夫。」

鼻から赤い血が、細い糸みたいに垂れている。既に腹も頬も、赤紫色になっていた。それでもアオキは笑った。

『もう会わないから大丈夫。』

何回も頭の中でグルグル回る。俺はそのまま固まってしまった。

目に写るアオキは慣れない手つきで床にバラバラに落ちている自分の服をかき集め、着直していた。

「ごめんね」

笑った顔は、とんでもなく綺麗だった。扉を閉める音が聞こえて、俺はベッドの上に腰を降ろした。

——なんだったんだ……。

数秒の事にも、数分の事にも、数時間の事にも感じられる。

「……はっ……」

上手く息が出来ない。冷静になろうとしても、冷静になんかなれなかった。それでもさっきより怒りの爆発は落ち着いて、俺の脳は次第に昨日の事を思い出していく。

酒を飲みまくったんだ。気持ち悪い程機嫌が良かった。心配したんだろうアオキがこっちに近づいて来て、俺から酒を遠ざけて、背中をさすったりしてくれた。何回も大丈夫？ と問いかける声が耳

元から聞こえてくる。その声が妙に心地よくて。

見たアオキの顔は驚くほど綺麗で、心配しながら眉を引きあげて、微笑っていた。

綺麗で、綺麗で。綺麗だった。

これ程までに思った事は確か無い。つい触れて見たくなって、少しだけなら大丈夫かと、ゆっくりとその頬に触れてみた。温かくて、柔らかくて、吸い付いてきて、心地よくて。

「伊崎さん？」

それから先は……。

「……な、……って……」

何て事をしてしまったんだろうか。

辿った記憶に、アイツは何一つ謝る事はしていなかった。

むしろ俺が。……何も無いアイツを殴ってしまった。蹴ってしまった。最悪だ。社会人として、年上として、人間として。

「俺は……なんつー……」

俺は、何て。

なんて、

悪い奴（後書き）

続きます。

NEXT↓ 悲しい子

悲しい子（前書き）

久しぶりの更新・・・遅くなってすみませんでした

悲しい子

俺だってそれくらい、分かってた筈なんだ。

＊

「ねえ最近、元気ないね」

ザーザーと雨の降る日曜日。

休日の今日で、じゃあどこかに出かけようか。なんて考えていたまさにそんな時振り出した雨だった。雨は一向に止む気はなさそうで、空は曇天、たまに雷さえ降りてきている。

「そうか？ ……ああ、最近契約取れなくてなあ。ちょっと苛ついて沈んでるかも」

しょうがないので、今日は1日ゆっくり家で寛ごうと、妻とTVを見たりゲームをしながら会話をしていた。

「そっかー、大変だね。頑張れっ」

——お客さんは努力家だね、偉いなあ。

仕事頑張れとか、応援してるよ、とか、そう言われる度に思い出すのがアオキのあの言葉だった。初めて言われた、偉いの一言。仕事をするのは普通の事だと思っている俺だったけれど、正直、あれは嬉しかったのかもしれない。

「瑛太、コーヒー飲む？」

「飲む」

俺は最低な人間な筈なのに、何故今ここでこうして笑っているんだろうか。妻と言う女がいて、立派なサラリーマンで、毎月給料だっちゃんともらっている。

『大丈夫』

あの日のアオキは、酷く醜くて、酷く綺麗だった。

『忘れるから、忘れよ』

妻が遠く友達の家へ泊りに行っていた夜、この家で一緒に夕飯を食べていたアオキを、俺は酔っていたせいで訳も分からず抱いてし

まった。その癖朝起きて何故か裸の俺の隣に裸のアオキがいて、訳も分からずパニックになってアオキを殴って蹴って。

アオキを家から追い出してから記憶が鮮明になっていった。

そうだ、確かに、何度思い出しても最後は俺から誘っている。アオキは殴りも蹴られもするような事はしていない。

『大丈夫』

何にも大丈夫なんかじゃない。

『お互い口に出さないで。もう会わないから大丈夫。』

もう会わないから大丈夫。そうアオキは最後に言って、笑った。でも、だから大丈夫なんかじゃない。俺はもう1度、あの子と会って話をしなきゃいけない筈なのに。謝らなきゃいけない筈なのに。あのバーには罪悪感と遣る瀬無さから、その場に行っても入り口に立ったまま、そのまま中に入れないでいた。入口の前に立って、そうして少しすれば諦めて電車で揺られる。

それが何回続いた事だろうか。

やっぱり、アオキの言う通りもう会わなくなってしまうのだろうか。

「あ、そうだ瑛太。今日の夜さ、出かけよ！」

雨が降っているというのに、突然妻がそんな提案をし出した。

「雨降ってんのか？ ……どこ？」

「こないだ言ったところ。いきつけのバー」

コーヒーを口に含みながら、俺に笑いかける。

「っ……」

ドキリとした。

もしかして、もしかして俺があの日アオキと寝た事に気づいているんだろうか、なんて、そんな疑問が心臓をバクバクとさせる。その笑顔の意味は何なんだと。

「――」

でもすぐに、この言葉はそんなモノじゃないって事に気付いた。最近ハマっていると、よく聞かされていた。俺がアオキのいるバーに

たまたま入ったのも、妻がよく言っていたのが耳に残っていたからで。

「ね、行かない？」

多分、こんな提案をしたのは、沈んでいる俺の為なのだろう。ニコッと笑ったその顔に、心の中で謝った。

「わかった、いーよ」

雨はそれからも空気も読まずに降り続け、止む事は無かった。夕飯を食べ、お互い出かける準備をし、家を出たのは夜の9時くらいだった。行こうか行くまいか二人で悩んだりもしたものの、結局外へ出ることにした。駐車場へと向かい、車に乗り込む。会社には車には乗らず電車で行くから、久しぶりのその匂いを懐かしんだ。それから妻に場所を案内させられながら人気の多い街道へ入った。

いつも仕事帰りに通っている道。

「あ、その信号左」

「ん」

言われた通りの場所で言われた通りに曲がる。曲がったところで、また思い出す。この辺りに、アオキのいるバーがある。あれから何度も立ち寄った癖に入れないバー。お世辞にも綺麗とは呼べないキラキラしまくりの外に目をしかめる。ネオンが集まった蛾を無視する人がうじゃうじゃとそこら辺を歩き回っているのを、俺は運転しながら見つめていた。信号を左へ曲がり、少しだけ車を走らせる。走った先にあったのは駐車場で、鉄で作られた小さな箱から駐車券を取り出し、車を駐車した。

「あっち、早くいこ？」

ウキウキと、無邪気な笑顔と軽快な声で嫁が俺を促す。はいはいと、俺は少しばかり呆れながら手を引かれて行った。

「ちようどここら辺に……あ、あそこっ！」

無邪気な笑顔で妻が指差した場所を、俺は確かに目に映した。今はそう、前も、この場所を目に移している。入りたくて、それでも入れなくて。足が竦んで。

「こんな……」

こんな偶然なんて、無くていい。偶然？ 俺はさっき、何を疑っていた。……そうだ、俺があの日アオキと寝た事に妻が感じているんだろうかと、そう心臓をバクバクとさせていた。……こいつは本当は分かって――。

「瑛太ー、何やってんの。早く入ろう？ 雨、当たるよ」

その笑顔に、そんな裏なんか見えなかった。俺を促す声だって、俺に来い来いとする手振りだって、感じているようには思えない。じゃあなんだ。本当にただの偶然なのか？

「えーいーたー！」

「い、ま……いく！」

声が裏返る。急激に喉が渴いた。

竦む足は妻によって、俺が浮気した相手の居る店に徐々に近づいて行っている。なんつー地獄なんだ。誰か、俺を今すぐここから逃げ出させてくれ……。

そんな願いも空しく、カランカランと音を立てて店の入口が開いていく。

「いらっしやいませ……おや、お久しぶりです」

また心臓がドキッとした。もしかして俺に向かって言っているのか。こないだ買い出しに行っていて途中から戻ってきた……店長？ だろうか。

「ご友人宅への旅行はどうでしたか？」

「オーナー！ お久しぶり！ すっごい楽しかったですよー！」

二言目、それで、それは俺に向けられたものではないと言う確信に導いた。妻の返答も親しそうにやけにフレンドリー。そんな親密になれる程ここに通ったのか、とか、あんな高いもの飲んだのか、とか、そんな驚きだって、今の状況に比べれば安いもんだった。

妻が中に入って、まだ店の入り口に立っている俺に気付いて手招きをした。

「うん……あなたは……」

俺を見て、少しだけ不自然に目を見開く。

「この人、ウチの夫なの」

「……あ、ど。…どうも」

「…そうですか。それは歓迎しなければいけませんね」

満開の笑顔で、少しだけおちゃめなように言った。

「どうぞどうぞ、お座りになってください」

素知らぬ顔をしているのだろうか。それとも本当にこの前来たって事も忘れているのか。できれば後者の方がありがたいのだが。

カウンターに通され、そこに座らされる。俺の記憶が正しければ、前来た時と同じ席に座っている。そんな感じに、俺は着々と『逃げたい』と言う気持ちをまるでいつか学校で習った『細胞分裂』の容量みたいな感じで、それを倍増させていった。

ふいに視線に気付いた。

座った俺の頭の、少し先。

「……」

その視線は、誰に聞かなくとも、誰か分かる。妻にオーナーと呼ばれた男は、気付いている。俺の事を忘れてなんかいない。それに、きっと、他から初対面の取られるような言葉を敢えて使っていたのも、俺とアオキの間の事情を知っているのだろう。

恥ずかしさで顔なんかあげられなかった。

「今日は何に致しますか？」

「んー、私は――…じゃあジン・デージーかなー」

「かしこまりました、旦那さんはどう致しますか？」

「えと……俺は……」

メニューを見たって、何が何だかよく分からない。意味の分からない名前がずらりずらりと並んでいて、これは本当に酒の名前かと言う程にオシヤレすぎる。

「ぷ……ぷりめーら……？」

よく分からなかったので、目に付いたモノをとりあえず声に出してよんだ。

「かしこまりました」

オーナーそれから、色々な液体を次々とカップに入れ、それをお決まりのポーズでミックスし、手際よくグラスの中に液体を注いでいった。あつと言う間に違う種類の二人分。

「……」

アオキの作った青とは程遠い色。グラスを持って、恐る恐る一口だけ口を付けた。ほろ苦くて、そして美味い。

「んー！ やっぱオーナー作るの美味しいなあー」

「ありがとうございます」

薄くはにかみながらオーナーが会釈をする。頭を上げる時に、オーナーがちらりと俺の方を見たのを、見逃せる筈もなく。ドキリと胸がしなり、それからバクバクと高い振動を鳴らし続けた。

「ああ、そうだ。……オーナー、あの子は？」

「……？」

バクバクバクバク。

「『青木』君！」

バクバクと鳴った心臓は、その妻の一言で鳴りやんだ。一瞬だけ耳がキンとして、それから止まった。俺の何もかもが止まった。それでも視界向こうの世界は止まらずに進む。

「青木君の作ったお酒もすごい美味しいんだよねー。瑛太も飲んでみたくない？」

「あ……ああ……」

小さな声で呟いて、目を覚まそうとカクテルを口に含む。

苦い。苦いから、苦いけど目が覚めないから、きっとこれが現実で、物凄く苦かった。

「オーナー、今青木君は？ 休み？」

「彼、ですか？ 彼は――」

休みの筈がない。彼はあまり定休日以外は休まないと自分でそう言っていた。今日はなんだ。定休日ならマズ俺はここには座っていないだろう。

アオキは居る。ピツシリと服装を決めて、また酒を作りにくる。地獄だ。俺は、どうやってあの子に顔を合わせればいい。妻が隣に居る。それなのにテンション高く彼に話しかけられやしない。それこそあの子にとって最低の行為になる。謝る？ 全部が妻にばれてしまう。

どうすれば……どうすれば――。

「買い出し戻りましたー」

高いような、低いような、そんな声。

ガチャリと音を立てたドアから、どっかの車の走行音と共に上げられたその声に、俺は少しだけ身を震わせた。

「青木君ー！ 待ってたよー。またお酒作って！」

顔なんか絶対に上げてらんなかった。この声は完全にアオキで、妻だってこの声の主を『青木』と言った。

アオキだ。

「あ、伊崎さん。ご無沙汰です」

その一言に、硬直する。伊崎さんてのは、それはもしかして俺の事か？ 1週間ぶりの再会。何も嬉しくない。

「『お泊りは楽しかったですか？』」

お泊り。……お泊りは楽しかったですか？ 確かにアオキはあの日あの家にお泊りした。それでも、だから……いや、この聞き方はおかしい。

あれ？

これじゃあまるで、妻に……。

『オーナー、今青木君は？ 休み？』

俺の妻は、どうしてアオキを知っている。

『伊崎さん。ご無沙汰です、お泊りは楽しかったですか？』

アオキは何故、どうして妻を知っている。

『すごい幸せそうだ。……奥さん。知的そうで、優しそうで。……良い人だね。』

あの時のあれは何だ。羨ましそうに俺と妻が写る写真を掴みかけ

て、結局は途中で手を止めた。何やら悲しく羨ましそうに笑ったあれは、何だ。

「あ、青木君。紹介するね、私の夫の、瑛太！」

「……っ！」

突然の紹介に、ビックリした。ふいに顔が持ち上がる。黒縁メガネのその奥の瞳。その瞳と、たった今、目が会った。バクバクと心臓が高鳴る。何も言えない。このままじゃ妻に不審がられる。どうする。アオキは何を言う。復讐するか？ 全てをバラすか？ おい、……。

「初めまして、青木です。どうぞよろしく」

その瞳は、たった今、生まれて初めて俺と目が会ったような、そんな顔をしていた。無意識に見開いた目から映るその瞳も、何も変わらない。

「――」

何言ってるんだ。お前、俺に酷い事されたんじゃないのか、アオキ。俺は今の環境を崩されても良いくらいにお前に酷い事をしておいて、どうして何も言わない。何もしない。そればかりか、俺の事を全然知らないふりして、『初めまして』だと？

その目も笑顔も、俺はちゃんと知っている。

ちゃんと見た。それで崩壊させてしまった。

この建物の前に立ち尽くしたまま入れずに、来ては帰って来ては帰って。ようやく入れたかと思えば隣には妻が居て、妻に真実がバレるのが怖くて下を向いてる俺に向かって、お前は何を言っているんだ。

「店長、これ、領収書」

「ごくろうさん」

カウンターに入ってオーナーに領収書を渡し、袋の中から買ってきたものを取り出す。俺は何やらゴソゴソと動いているアオキをジッと見ていた。

酒の味がほんのりと苦い。

まさか本当に忘れてしまったって事はないだろう。あんな事、忘れたくても忘れられない筈だ。この子は絶対に本人に間違いはない。オーナーだって、妻だってこの子の事を『青木』とそう言った。もしかして双子とか……そんな事なんか無いだろう。

「青木くーん」

妻の一言に、ビクッと体が震えた。

「なんででしょうか？」

妻の言葉に、薄くはにかみながらの応答。曇ったモノなんて、何も無かった。

「青木君も何か作って！」

「かしこまりました、何に致しますか？」

「青木君イチオシのでお願いします！」

「了解です」

そんなやりとりを、俺は不思議そうに見ていた。あれを不倫だとか、浮気だとかと呼べるようなモノかは分からないが、やってしまえば結果浮気にはなるだろう。

俺がやってしまったその浮気相手と、俺の妻が笑顔で一緒にしゃべっている。

わけがわからなかった。

——とっとと終わってくれ……。

まさに地獄みたいな時間を過ごしていると思った。

「……」

小さな動作で顔を上げ、目線だけをカウンター奥へと追いやった。オーナーは真っ白で清潔そうな布巾でグラスを拭いている。その横で、何やらカチャカチャと小さな音を立てて準備をしているアオキがいた。奥の棚から何やら数種類の酒を手に取り台に置く、蓋を開け、酒を色々な分量でシェイカーに入れて言った。

蓋を閉めて、強く閉めて、アオキはそれを見事にテレビで見るようなしぐさでふった。この前来た時も確か、きっと変わらない。

淡々とした、すごいなと言う感想だっけ一緒だった。

それから何回ふったかは数えてないから分からないけど、数十秒たって、酒が混ざり合う音が止んだ。アオキは一息吐く暇もなく、シェイカーの蓋を開ける。ちまっこいグラスを二つ並べ、そこに酒を注ぎだした。

糸みたいな青い液体が透明なグラスの中に注ぎ込まれる。今にも途切れてしまいそうな細さに、一瞬目が狭まった。

綺麗な青だった。

薄暗い店の中の小さな明かりがグラスに反射して、水面に反射して、それすら美しい。

「……」

息を飲み込んだ。

空のように鮮明な青い色、海みtainな綺麗な色。

俺はこの色を知っている。俺は忘れてなんかいない。アオキが作り出したこの色。この記憶は、無かった事にならないだろう。

「どうぞ——」

渡されたグラスは二つ。一つは妻で、一つは俺。それぞれ目の前に出されたグラスは、チマっとした小さな底に、長い持ち手。

あの時と、何ら変わりはない。

俺はその長い持ち手を持ち、あの時より少しだけ躊躇しがちにグラスに口を付けた。口の中に僅かだけそれを含む。

海みtainに綺麗な青色は、だけど海より何倍も甘い。だからきつと、空を液体化してそれを飲み込んだら、きつとこんな味になるんじゃないだろうか。

「……うめえ」

やっぱり美味しくて、俺はチマっとした中身を、いっぱい口に含んだ。

そんな俺に、横にいる妻がクスッと微笑む。

「瑛太ー、いいところでしょお？」

「……ああ……」

「えへへー。私のお気に入りなの。また一緒にこよ？」

カクテルを飲みながら上目遣いでそう言われる。

断るなんてできなくて、それでもまた来たいなんてそんな事も言えなかったので、俺は出来るだけ小さく笑った。

＊

その次の日、俺は仕事を出来るだけ早くこなし、会社を出た。朝から外は昨日とは打って変わっての晴天で、確かアオキに初めてあった時の朝の日もこんなだったな、なんて思った。

会社を早く出た俺は、そのまま真っ直ぐ妻の居る家には戻らずに、店の目の前に居た。昨日来たからなのか、心の中で何かを決意したからなのか、足の竦みや躊躇などはあまり無い。ただその奥を見据えて、ドアを強く押した。

チリンチリンと涼しい音が聞こえる。

「いらっしやいませ——すいません、開店まであともう少し時間があつて、少々お待ち頂ければ……」

こちらを向いてから、酒の瓶を並べている手と、言葉を紡いでいる口が止まった。

「おや、……今日はお一人ですか？」

そこにはオーナーが居た。

「はい、…あの、今日はアオ……『青木君』は……？」

アオキと呼ぶには余りに失礼な気がした。

「青木はまだ出勤時間じゃないんです。もう少し経ってからきますよ」

「はぁ……」

「立ち話も何ですし、さ。どうぞこちらに」

昨日と同じカウンター席に通され、俺は鞆を隣の椅子に置き、そこに座る。まだ酒を作る準備ができてないからと、割った氷と水を入れたグラスカップを差し出してもらった。

「昨日はどうでしたか？」

ふいにオーナーにそんな事を聞かれた。

「美味しかったですよ、酒」

水を一口だけ口に含む。冷たくて、それさえも美味しい。

「驚いたでしょう」

それから急にそんな事をさらっと言われて、口に含んだ水をごくんと飲み込んだ。

「青木のあの態度。少し混乱したんじゃないですか？」

少しどころじゃない。

「あの……やっぱり、事情知って……？」

「いや、青木の態度が最近おかしくてね、喋ってみろって言ったら、すこしだけ話してくれました。昨日伊崎さんと一緒に来たのがあなたで、ピンとききました」

「……あの、今回は本当に……申し訳ありませんでした……」

テーブルにくっついてしまいそうなところまで、頭を深く深く下げた。

「私はいんですよ、……それに、青木にも否がありました。奥さんの伊崎さんは一月二月、……少し前からしばしば来ていただいていたんです、青木とも仲が良く、あなたの事もよく話されていました」

「……」

「あなたは青木の事を知らなかったが、青木はあなたの事を知っていた。その真実だけでも、悪いのは青木の方だ」

「そんな事……」

「それでも、あの子を……あまり青木を悲しませないであげてください」

その一言に、俺の後悔がにじみ出た。俺はもう、アオキを酷く苦しめて悲しませている。

「あの子は、あなたに自分の家や家族の事を話しましたか」

『ああ、うん。家、一人でさ。料理とか……あんまりした事ないんだよね』

コンビニでの会話。今は家に一人。それ以外に、何も聞いていない。そういえばと思い出すが、俺は自分の家でアオキと会話している時だって、アオキは自分の事は余り話さず、俺の話しを聞くばかり

りだった。

「いえ、……特には：俺が自分の事を話していたばかりで…」

「そうですか、……また悪い癖が…」

「……？」

「あの子、親がいないんです」

目が点とした。

「本当の親から虐待を受けていて、小さい頃親が自殺しているのを間近で見っていたんです」

言葉を失くした。

「『自殺に及ぶのから死んでいくまで、ちゃんと見ていろ』と、親にそう言われたんだそうです。小さい頃の青木からすれば、あの子の世界はまだ親だけで、それが1番ですから、ちゃんと言う事を聞いていたんでしょうね。それから親戚や色々なところを転々としたんだそうです。だけど、『親が死んでいるのに泣きも助けもせず、それをただジッと見ている』そんな言葉が転々としている間いつまで経っても消えず、周りから向けられる目もいつまで経っても変わらない。」

「幼い子供の頃の気持ちを忘れてしまった大人からすれば、青木は奇妙で気持ちの悪い子供でしょう。誰も多くは子供のころ、『親の言う事は聞け』と言われる。青木はただそれをしてただけだった。幼い脳では、それに逆らうなんて言葉は知らない。なのに気持ち悪がられる。ただ言われた事をしただけだったのに、それが自分にとっての普通で、当たり前の事だった。それでも周りは青木の事を気味悪がる。だから青木は自分の事を他人に話さなくなったんです」

「……なんで…」

「それはきつと、嫌われたくないからでしょう。誰かに自分の事を喋ったら嫌われる。それが青木にとっての1番になってしまった。好きになった人には絶対に好きとは言わない。思い出も、悲しかった事も嬉しかった事も話さない。話したら嫌われると、小さい頃から勝手に自己解釈して、そう思い込んでいるんでしょうね」

だから、アオキは妻の事を話さなかったのか？

写真に写る妻に、アオキは気が付いていた。それでも何も言わない。何かを思っ、そこで止めた。嫌われると思ったから？　…俺がアオキを殴った時も、俺からアオキに何かしたのを、酒の1滴も飲んでいないアオキは知っていて、それでも何も言わなかった。嫌われると思ったから。昨日の初対面のような態度もそれだ。嫌われたくないから。

「あの子是我慢することしか知らない馬鹿な子だ。我慢して我慢して、その我慢を爆発させることもなく、蓄積させ、そんな辛い事すら我慢する。あの子の昔の事を聞くのにも苦労した。あ……青木の飲み物に酒を入れたってのは内緒ですよ？」

オーナーのギャグだって、あまり耳には届かなかった。

「今は親戚の家を出て、ボロいアパートで独り暮らししています。1回行った事がありますが、本当に必要な物しかなくてビックリしました。買いたくても、我慢しているんでしょうかね……？」

『ああ、うん。家、一人でさ。』

「私の余談はここまでです。長いお話しにお付き合い頂いて感謝します」

小さく会釈したオーナーは、それからまた口を閉ざし、グラスを綺麗な布で磨いていた。

その目の前で、俺は言葉を失くして俯いた。

アオキの過去話を聞いて、そして改めて、俺はアイツに何て事をしてしまったんだろうと、そんな虚無感を覚える。そんな気持ちだって後の祭り。ずっと前からわかっていた事だ。

アイツを傷付けてしまった当人の俺には、アイツの傷を癒す事が出来るだろうか。……いや、そんな事は絶対にできない。俺はアイツに妻にも、誰にも言えないくらいに酷い事をした。酷い以上に、酷い事をしてしまった。謝ったって、それは許されない。

かと言って、このままではいけない。それは一番ダメな事。

じゃあ俺は――。

「俺は、『青木君』に何をしてやればいいんでしょうか……」

「……」

「勿論謝る。土下座だって出来る。……ただそれで、『青木君』の傷が治るわけじゃない。俺は何を……」

項垂れた。

目の前のオーナーからしてみれば、俺は子供^{ガキ}みたいな男に見えるだろう。それでもしょうがない。俺は見た目だけ大人の子供だった。

「アオキはあなたの事が好きです」

「……は、あ？」

いきなりの一言に俺は目を見開いた。

「な、に言ってるんですか」

「友好的にか、恋愛的には定かではありませんが、それだけは分かります。」

たった1度会っただけなのに。いや、正確には2度だけれど。酔った勢いでアオキを押し倒してセックスした。寝ぼけて、何も考えず、セックスしてしまった事を全てアオキのせいにした。いつまでも謝りに来なかったのに、ある日突然妻と一緒に現れた。こんな最低な事をしてた、そんな俺が好きだと。

「一途なんです。」

オーナーがそう言って笑ったので、俺はついつい眉をしかめた。

「あの子は自分が人に嫌われた分、誰かを嫌いになんかならないんだと思います。嫌われるのが嫌だから、人を良く観察する。長所短所を見つけ、短所を踏まえた上で人を好きになる。子供なのに大人なんだ。……まあ、青木にとってそこが短所なんですけど」

「……」

「だから、あなたの短所だってきちんと分かっている。その上であなたを好きになった」

「俺の短所……」

「謝るだけなら謝るだけでいい。それだけだって、ちゃんと区切りはついている。……ただ、中途半端は良くないし、俺も止めて欲し

い」

俺を睨みながら、少なからず笑ったオーナーを見て、チリチリと頭皮から緊張が走って、体中を駆け巡った。

「中途半端？」

「さっきも言いましたが、青木はあなたが好きです。どっちの好きであれ、体の関係を持つてしまった。それだけはたとえ青木が無い事に仕立て上げたとして消えません。青木にちゃんと謝った。でもそれだけじゃ青木の傷は癒えない。じゃあどうしよう、このままさよならはいけない、じゃあどうしよう。……なんて、そんな中途半端な付き合いをされちゃ困るんです。それがあの子をもっと傷つける事になる」

ちゃんと答えを決めてから青木と付き合いえ。

オーナーはそんな真剣な顔をして、俺を睨みあげた。そこで俺は気付く。この人は俺を憎んでいる。……いや、怒っているのか。

「……はい」

それも当然か。

この人は青木を心配している。自分じゃどうしても青木の幼い頃からの心の溝は埋められないと分かっている、それでもなんとか埋めてやりたいと必死になっている。そんな中、横から現われた俺が青木の心の溝を深めやがった。

キレてしまいたいのは当然だ。

「あなたには奥さんが居る。青木とも関係を持つてしまった。良い奥さんを選ぶか、傷つけてしまった青木を選ぶか。……あなたの好きな方を選ぶ方がいい。どちらにせよ、私は何も言いません。ただ、どっちもなんてそんな中途半端は、絶対に許しません」

それは分かっている。

妻に対しても、アオキに対しても、オーナーに対しても失礼で、侮辱だ。

それでも俺は――。

「――オーナー、おはようございます。……っ……あ、と。いらっし

やいませ。昨日もいらしてましたね」

入口のドアが開いて、夕方だと言うのにおはようと挨拶しながら、アオキが入ってきた。まだ髪型もセットされていない。多分これからセットするのだろう。

俺を見たアオキは、やっぱりあの日の事を無かった事にしようとしていた。

忘れるから忘れよう。大丈夫。あの時アオキがそう言った。お前一人忘れようとしたって、忘れられる事じゃない。俺は絶対に忘れてなんかやんねーし、お前にだって忘れようと、そんな我慢なんてしてほしくない。

「オーナー、帰ります。水、ありがとうございました」

「そうですか」

小さくつぶやいて、オーナーが少し残念そうに笑った。俺をそれを見た後で、横の椅子に置いた鞆をとり、席を立つ。入口の前へスタ歩き、それでもそのまま入口を出ずに、アオキの目の前で止まった。

「アオキ、今日は何時に仕事が終わる」

「……、ん……え？」

アオキは大きく戸惑った。

「何時に終わるんだ？」

「えと……あの、…12時。過ぎると思いますけど……」

未成年は10時過ぎて働いたらダメとか、なんかそんな法律があったらと思うたけれど、こいつは未成年にして酒を作ったりしていたので、思っても口には出さなかった。

「終わったら、あのコンビニに来い。……待ってる」

「え……っちょ。……伊崎さんっ?！」

困惑しながら俺を呼ぶアオキを背中、俺は今度こそ入口から外へ抜けた。

風は少しだけ強くて、それでいて少しだけ冷たい。空は茜色の空から赤やオレンジや紫や、さまざまな色が所々に変わっていた。

綺麗で、アオキを思った。

＊

「寒いでしょう、明日も仕事あるじゃないんですか？ 夏風邪引いてもアレですし。俺の家行きましょう。家、誰もいないんで」

相変わらず紛らわしい言い方をするアオキの頭を、ムツとしながら睨んだ。

深夜過ぎ。妻はもうとつくとつくに眠りについていたので、俺は少しだけ厚着をしながら家を後にした。あのベッドで妻と寝るのは、やっぱりまだ辛い。

15分くらいたったくらいに、髪の毛をセットしたままのアオキがコンビニの影から顔を出した。少しやりづらいような、そんな顔をしていた。そんな顔をしながら自分の家に行こうと言われたので、俺はムツとしながらアオキの後ろについていく事にした。

ついたのは本当にぼろアパートと呼ぶべきにふさわしいような、そんなアパートだった。階段も屋根も錆びついていて、土からは1メートルも無いだろうが、それでも長い雑草だって生えている。

「ここです」

ポケットから鍵を取り出し、それを鍵穴に差し込みカチャリと音を立てさせる。そうして開いたドアの向こうに入り、俺を招いた。

さっきから俺の心臓はバクバクしっぱなしで、本当に情けないと、そう心の中で思う。

少し経ってからアオキが居間の電気を付けて、ビックリした。

「……」

畳まれた敷布団とタオルケットと掛布団と、その上に置かれた枕1つ。TVなんて無くて、冷蔵庫と、タンスと、小さなテーブル。横には散らばったような、所々整理されているような参考書と問題集の山。台所にはフライパンと鍋と食器棚と、封の空いてる、でも新品のように使われていない少しの調味料があった。食器棚には皿の数枚とコップしかない。

オーナーの言った通り、必要な物しか置いていない殺風景な部屋

模様だった。

「すみません、ロクなもてなし出来なくて」

「いや……いいんだ…」

俺にそんな事してくれる必要は、お前にはない。

「ああ、膝痛くなるでしょ、すみません。座布団の変わりに布団に座ってください」

来客はあまりないのか、座布団は無いらしい。俺は遠慮しがちに、それでもしっかりと布団の上に座った。

その目の前に、アオキが座る。

「……で。……どうしたんですか？」

「どうって……」

まるで何も無かったかのように、目ん玉を丸くしながら聞いてきた。

「お前、……俺とお前の間に何があったか、……ちゃんと覚えてんだろ？」

「うん」

黒い瞳が、少しだけ俺から逸れた。

「俺がアンタを誘ったんだ。……だから、ごめんなさい。もう二度と会わないとは思ってたんだ。でも会っちゃったから、……でもさ、忘れるって約束したから俺は……」

「そうじゃないだろっ」

「え……？」

こいつは、どうしてこう全てを自分のせいにするんだろうか。それで相手が満足するわけがないじゃないか。

「俺にだって、否があっただろう」

「……無いよ」

あまりにも綺麗に笑いながらそんな事言いやがったので、やっぱりまた俺はあんぐりした。心からわなわたと湧き上がる……コレはなんて感情なんだろうか。

「大丈夫。全部俺が悪い。伊崎さんは、何も悪く無いんだ。大丈夫

だから、…だから……」

ダイジョウブ。またそれか。大丈夫。

「ごめんなさい」

「やめろっ……！」

大丈夫だのごめんなさいだのを連呼しまくるアオキが怖くなってきて、俺は少し強めにそう言った。

「ちゃんと考えろ。あの日。本当にお前だけに否があったか？　嘘なんか吐いたって無駄だ。……俺は全部分かってんだ」

「……」

お前が俺の事、妻の事を知っていた事。俺からお前を誘った事。それに加え、お前の過去も、お前の短所も、全てを分かった。

嘘なんか吐かなくてもいいんだ。

「お前はどう思った。お前の思った事を全部話せ。嘘や我慢は無しだ」

「……俺はどうなんて……」

答えずらそうに下を向くアオキに、またしても俺の心に湧き上がる分からん感情。

「アオキ……」

「伊崎さんの奥さんは、すごくいい人だった。初めに会った時からそれは変わらなくて。……この人がお母さんなら、俺は多分、生まれてから死ぬまでずっと幸せだったんじゃないかなって思ったんだ。そんな人の旦那さんは、やっぱり良い人なんだと思った」

「お前にとって、俺は本当に良い人だったか？」

「うん、すごく良い人なんだ。こんな俺をいつまでも気にかけてくれる。……今だってそうだ。……きつとあの時から沢山悩んだと思う。憎むんじゃないくて、……それだけで俺は嬉しい。それでも俺は。……俺だってそれくらい、分かったた筈なんだ。」

何を……。

「あの時、アンタの家の写真に写ってた奥さんと伊崎さんを見て思った。本当に幸せそうで、……俺はいままで、俺の近くでこんな幸

せそうな顔で笑った人を見た事がない。きっと俺は疫病神みたいな奴で。人に嫌悪感を与える事しかできないんだと思う」

「そんな事……ねえだろ」

「あるよ、伊崎さんが俺を殴ったのだって、それだろう？」

反論は出来なかった。

「きつと絶対、俺があんた等の近くに居たら、また写真みたいになんな幸せそうな笑顔は出来ない。それが分かって、俺はあんたとセックスした。こうなる事も、薄々は全部分かってたんだと思う」

「――」

胸がツキツキと痛み続けて、苦しい。

「だから、ごめんなさい。本当に忘れてくれたら嬉しい。俺はあんたと奥さんの関係を崩したいわけじゃないんだ」

なんだ。なんなんだ。じゃあ、俺と妻の関係を崩したくないなら、お前が傷を背負っても良いってのか。それは。

それは違うだろう。

「なんで、全部自分のせいにしたがる」

「……なんでだろう」

冗談半分にそう答えて、アオキが少しだけ黙る。何かを考えて思いついたのか、しばらく経って口を開けた。

「嫌われて欲しくない」

目を見開いた。

この子は本当は全部、分かっているんじゃないだろうか。自分の長所短所。自分の性格も、自分の存在も。多分自分の考えが間違っているって事にも、自我的にじゃなくても気づいている筈だ。それでもそれを直そうとしないのは、幼い、昔から受けてきた中傷と罵声と――。

さつきから止まらん心の中の変な感情の意味を悟って、俺は自分の胸板にアオキの頭を押し付けていた。強く強く、アオキが暴れるのを無視して、ぎゅうっと強く。諦めて暴れるのが収まっても、強く強く抱きしめた。

切なさも一理、苦しさも一理、寂しさも一理、空しさも一理。
そんな悲しさが全て。

＊

それからこの部屋を何度と訪れるのは――。

悲しい子（後書き）

N
E
X
T↓ 限りなくアホ

限りなくアホ（前書き）

アホとバカの話し。

久しぶりに作者視点で書いてみました。
一気に二人分の気持ち描写が書けて楽ですね

限りなくアホ

昔から頭が良い。

切ったばかりで違和感だらけの髪の毛を指で梳き上げながら、男は毎度の事自分をそう思った。小学1年の初めのテストから始まって11年。テストの点数の最低点は77点で最高点は105点。

親も爺さんも婆さんも先生も周囲も皆、男を誇りに思っている。誰かが昔、男の事を神童だとか、アインシュタインだとかとも言った。

でも男には相対性理論なんか名前くらいしか知らない。

「あれだろ、……あのー、宇宙に行くと時間が遅くなるとかなんとか」

学校では教えられてないし、教科書にだって乗っていない。やっぱり学校の勉強と言うのは教育プログラムと教科書を中心に動いていて、男は教えられないものや載っていないものは頭に入れようとも思わなかった。

——知らなくたってテストにゃ出ない。

無駄を覚えない男は、人を好きになった事もない。小さい頃のお母さん大好きっ！とかのそういう好きとかではなく。男はなんで自分が他人をそんな感じに好きになれないかをちゃんと考えて、そして知っていた。

「他が俺よりバカだから」

男は何とも人に嫌われやすい事ばかりを考えていた。確かにいままでに告白された事は何回か数えられる程度あった。バカで、勉強よりも恋愛。恋がしたい！勉強なんてそんなつまらない事してらんない！日々自分を磨いて、爪を伸ばして色を付けて色々装飾して、髪を長く伸ばして、やっぱり色を付けて、巻いたり盛ったり色々装飾。毎度毎度その調子で、無駄な事に金を費やす。

「くっただらねー」

と口から洩らせば、何故か頬を思い切りブツ叩かれてそれで終了。これだから恋愛ってのは中々のめり込めも出来ない。

男は別にそれでも良かった。気にもしなかった。恋愛は別に心理上無駄な事とは言えないが、必要な物とも思わない。したい奴だけそれをする。そんな感じで良いと思った。

＊

ある日の事だった。

こないだやったテストの返却日。点数はやっぱりと言うかそうかと言うか、98点。1問だけミスってしまった事を悔やみはしたが、それは終わりを告げるチャイムの時には知っていた事。やってしまった事はしょうがない、終わった事は仕方ない。

それに、俺は頭が良い。先生だってそれは分かりきっている。いつもテストで90点題を叩き出す人間を、世の中は『馬鹿』とは呼ばないだろうと、男はきっぱりと諦めた。返却されたそのテストを綺麗に折りたたみ、教科書の隙間に挟めた。

授業が終わり、SHRが終わる。男はやっぱり無駄な事が嫌いなので、誘われた遊びを断り、ただ家に帰る為に校舎を出た。校舎を出てひたすら帰路を歩いていると、制服のポケットに入っていた携帯が震えた。画面を開くと、それは母さんからのメールだった。

「母さん今忙しいから帰りにスーパー寄って買い物してきてくれな
いかな？」

男は何の迷いもなく了解と返信した。

家に帰る為に歩いていた道を逸らして、スーパーへと向かっていると、少しばかりして母親からまたメールが届いた。買い物の一覧。少し行を置いて、よろしく。と、それだけ置かれていた。

「いらっしやいませー」

自動ドアを一步くぐれば、食品の鮮度を比較的保つ為の冷風が一気に体を襲ってきた。外の暑さに掻いた汗が寒い。カゴを持ち、さてさてとさっき送られてきたメールを一目通す。色々な物がびっしりと書き込まれていて少しだけ嫌気が指した。

嫌気が指したので。

「店員さん。これ、全部買いたいんだけど」

何やらせかせかと品出しをしている近くの店員に、ずいっと携帯の画面を突きつけた。

「はいっ……？」

笑顔で横を振り向くと、すぐ顔面目の前に携帯の画面。店員は驚いた。

「え、っああ……はい、少々お待ち下さい」

携帯を丁寧にも両手で受け取り、書かれた品物を持って来ようと歩き出す。

「ついてくよ」

待っているのもアレなので、男は店員に付いて行く事にした。それから男は何の迷いもなく携帯画面に書かれた品物をカゴに入れていく店員の横顔をまじまじと見つめた。

店員の顔はどう見ても成人でも、中年ぽい顔でもない。自分と同じ年か、はたまたそれより1つ2つ下くらいの顔をしている。ただ童顔っただけで、ちゃんと20を超えていたりするのだろうか。

「ねえ、あんた何歳？」

男はちようど干しいたけに手を伸ばした店員にそう聞いた。

「え、おれ……僕ですか？」

「そう、あんた」

「16です。今高校2年生で、それが何か？」

「高2……」

思った通りの同い年。それでもどうしてだろうか。俺と同じ年の奴がこんな下校時間にスーパで働いているなんて。高校生と例えるくらいだから、ちゃんと学生なのだろうが。

「定時制の高校に行ってるんです。あ、この干しいたけ2種類あるんですけど、どちらに致しますか？」

「定時制か。……ああ、安い方で。同じならどっちでもいいよ。」
謎は簡単に解けた。

「俺の学校も定時制あるよ。早い奴はもう5時前くらいから玄関でたむろってるか……」

男が玄関を出るときにも、定時制の学生がギャーギャーと何が面白いのか爆笑していた。

「今日はその前のバイトが長引いちゃって、バイトの時間引き延ばしてもらったんです。まあ、学校には遅刻確定ですけどね、はは……」

苦笑いしたその店員が、安い方の干ししいたけと春雨をカゴに入れた。

「バイトは何個掛け持ちしてんだ？」

人の事など興味もなかった男は、何故かさらに話を続けた。心の中でなんでだろうと呟く。

「3つですよ」

店員の笑ったその顔に何か違和感を感じたので、男はそれからそれについて聞き話す事をやめた。

店員の対応は相変わらず速やかで、且つ丁寧だった。5分もすれば携帯に書かれた商品でカゴの中が埋め尽くされる。もう1度だけ携帯とカゴの中の商品を一致させ、「よし」と一言だけ呟いた。

「ご要望の商品はこれで全てになります。遅くなって大変申し訳ありませんでした」

店員がペコッと頭を下げる。

「ああ、こっちも。仕事途中に悪かった」

「いえ、……では。ありがとうございました」

もう一度だけ男にペコッと頭を下げ、店員は品出し途中の売り場へと戻って行ってしまった。

「……」

それから男はと言うと、その店員がカゴの中に入れてくれた売り物をレジで買い上げ、そのまま重たい荷物を持ちながら家に帰った。今日は塾が無いので、家で少しばかりの勉強をして、飯を食ってそれからPSPの電源を付けた。

「……」

勉強をすることはもうあまり苦ではない。最初はそれこそ嫌々勉強をしていた記憶がある。それでも、テストをすると必ずそれは結果として出てきた。それなら頑張ろう。親は勉強しろと言った。でも嫌だから嫌々勉強した。そしたら良い点数が取れた。じゃあもっと頑張ろう。もっと頑張ったら、どれだけ結果として出てくれるだろうか。

それは多分、ワクワク感にも似ていた。最近男は、それを親の策略に堕ちたんだとも考えた。

「……」

勉強すれば親が喜ぶ。男はそれまで、まだそれでいいと思っていた。それまでと言うのは、あの店員に会うまで。

店員は、自分は高校2年生だと言った。男だって17歳の立派な高校2年生だった。この違いは一体何なんだろうか。店員は、今バイトを3つしていると言った。俺はゼロ。この差はなんだ？

男は考えて、考えた挙句、親に聞いた。

「なー、俺ってさー。…バイトとかしなくていいの？」

「バイト？ いいのよ、まだそんな事なくて。勉強がんばって、大学から少しずつ働いていきましょ？」

親の脳には、男はもう大学に行く事が決定しているらしい。男は少しだけドン引きした。

そう言えばと思い出す。男は中学の頃、高校についても疎かった。いろんな高校についていろいろ調査や知る事は無駄な事ではない。高校生活や、その後の事だって左右するものだから。でも男はしなかった。いや、出来なかった。

高校受験に向けて、勉強しかなかった。

勉強して勉強して、進路の授業で先生の言っている事もまともに聞かずに英語の単語を暗記していた。そうして迎えた3者懇談の日。母親と男が隣に座って、目の前に担任が居た。

「真水君は大変成績も良く、結構レベルの高い高校を狙えると思

ます」

結構レベルの高い高校にいったら、これよりもっと勉強をしないでほならない。いっぱい勉強して、いい成績と順位をとって、親の喜ぶ顔を見なくてはいけない。

ハードルが上がる。それならば、『結構レベルの高い高校』じゃなくて『少しレベルが高い高校』に行きたいな。なんて、男はその時初めて高校について思った。

それでももう遅い。そう思っても、男は高校について全く何もしなかったから。近くの高校は名前くらいしか知らない。偏差値だって、名前以外は全くもってしらなかった。

「この子には、北星高校を受験させようと思うんです」

——なんだどこだその高校。

隣にいる母親がどこかの高校の名前を口にして、男は固まった。

「北星高校ですか？ あそこには確か特進クラスもありましたね」

——特進クラスだと？ 俺みたいに頭の良い奴がうじゃうじゃいるそんな中に入ったら、俺はもっと勉強せないけねえんじゃないか。

もしその北星高校てのが『結構レベルの高い高校』で、その中での特進クラスだったら、俺は……いや死ぬぞ。

男の脳内はグルグルしていた。それを全部吐き出そうとしても、男が勉強をして大変喜ぶ母親が隣にいて、男の頭が良くてしきりに男を褒めまくっちゃってる担任が目の前にいて、男は口を半開きにする事くらいしか出来なかった。

「先生、どうでしょうか？ 北星高校。……真水は、そこでいいわよね？」

そこでいいわよね、なんて笑いながら言われて、男は更に固まった。きつと今心ん中は岩みたいに固い。そこでいいわよね、なんて笑いながら言われたら、男にはうんとか、ああとか、はいとか、そんな肯定しかできない。それでも安易にそんな事して、本当に今以上に勉強漬けになったらどうしようか。

「あ、……そこ。…北星高校って、普通科と特進科以外に何かあり

ました？」

まだ肯定はしたくなくて、ていうか絶対にしてやるもんかと、男は容量の良い脳みそをフル回転して話を引き延ばそうとした。

「他……？ 他。あそこは……確か定時制があったりしたかな。他にも色々あった筈なんだが……ど忘れしちゃった」

「確か情報科と外国語科がありましたね」

「ああ、そうですね。」

情報に外国語、それに定時も請けおっている。

「ワタクシリツ？」

「イチリツだよ」

聞いてそんな事で悩んだりもしなかったが、ただ特進コースなんてのは一番嫌だった。外国語はあまり得意ではない。どちらかと言えば男は国語とか数学とか、そういう小学の昔から馴染みのあるものが得意だった。

「俺、特進じゃなくて情報がいいんだけど……」

家にパソコンくらいはある。そこらへんの浅い知識しか持って無いけれど、それは高校で習えばいいんじゃないんだろうか。その為の高校1年生だろう。男はそんな事を考えながら言った。

「確かに特進じゃないと深くまでは教えてくれないだろうけど、そんなものはネットで検索したりしたって、参考書の中にだって書いてあるだろ？ だったら俺は、情報とか外国科とかに進んで独学じや学びづらい事をやった方がいいと思うんだ」

「じゃあ外国科……」

「英語が出来ればいいだろ？ 情報科に進んだって英語の勉強はするだろうし」

厳しい展開から少しずつ少しずつ話しの起点を逸らし逸らし、男はどうか北星高校の情報科に進む、なんて進学を手にいれた。

そんな大きな山を越えて、また一つ。

「真水はどんな大学がいいかしらね？」

——どんな大学がいいとか、まずそんな話しよりも。俺は大学に行

きたいか？

男は口をぽかんと開けたまま母親の前から去った。

こんな事なら興味の無い情報に進まず、特進にも外国語科にも進まず、定時に行った方がよかったんじゃないだろうか。昼は何もないから仕事をして、夜は学校だから勉強して、暇だから検定試験に身を入れてみたり。

男は項垂れた。多分定時に行くったら、母親は男を監禁してまでも反対するだろう。反抗期！ 反抗期よ！ みたいな感じに焦って、興奮して、そんな親だ。

しょうがない。

じゃあしょうがないなら、黙って母親の言う通りの大学に進んだ方がいいんだろうか？ きっと高いレベルではなく、高い高いレベルの大学を指定してくるだろう。それなら死ぬほど勉強すればいい。でもきつととてもつまらない。

大学に進んで、ちよくちよくバイトもし出して、卒業して多分大企業か中企業に就職して。そして多分職場のOLなり同僚なりと付きあって結婚して、そんで子供でも作ったりするのだろうか。

全くつまらない。今の自分が未来の自分をリアルに想像出来るなんて、そんなつまらない事は無い。

「学生やめたくねー」

ずっとこのままだったらどれほど楽なんだろうか。男は考えて考えて、苛ついたのでベッドにダイブした。

——あの店員はいいな、……楽しんで。

それだけ思って、寝た。

＊

次の日は放課後の特別授業があったので、男は迷わずその授業を受けた。7時30を回る少し前にチャイムが鳴り、定時制の生徒も授業を受ける時間なので速やかに帰るように。なんて先生に言われ、男は教科書を鞆に詰め込み教室を出た。

それと同時に、横から何かが通った。突然の事で避けられず、男

の肩とその何かがぶつかった。

「あ、すいませ……」

「……」

その何かが男に謝ろうと頭を下げた。顔を上げた何かは男を見るなり少しだけ片眉を引き上げた。

「「あ……」」

同時に呟いて、男もその何かも何かに気付いた。

店員と客だ。

「定時店員」

「携帯男」

携帯男なんて言われて、男は少しだけカチンときた。ただ携帯を見ただけでそんな呼ばれ方された事はいままでにない。けれど、定時店員と言われた店員も同じ事を思っているようだった。

「この学校だったんですか」

「そりゃこっちの台詞でもあるけど――」

ここは店員の職場では無い。普通にここは学校で、同じ学校を共有している全日生と定時生のそれだけだった。それなのに店員は、スーパ－の時みたく男に敬語で話す。

「放課後授業ですか？」

「うん、まあ。今終わったところ」

「大変ですね。でもすごいですね、勉強出来て」

「はあ？」

その言葉は妙に嬉しかったものの、男はポカーンと口を開けて眉を引き上げた。勉強出来るのは普通の事だし、勉強するのが学生の仕事だろうと常日ごろ思っている。店員だって今立派に学生だった。「勉強は必須だろ？ 頭良くて損はしねえ」

「そうでもないかもですよ。就職試験の筆記テストで1位の人は落とされるって言うじゃないですか」

初耳だった。

「出来過ぎは周囲から浮くから、一人が断トツで出来たら周りがや

る気失くすって。」

初耳だった。じゃあ勉強しなきゃいいんじゃない？……それじゃあ筆記試験のクソもない。

「……てか、なんでそんな事知ってんの？」

もしかして店員はめっちゃくちゃ頭が良かったりするのだろうか。

——俺よりも？　ありえねえ。こいつあ定時生だぞ。

「え、……なんでだろ？」

店員はエヘへと笑って頬を掻いた。

少しだけイラッとした。

「あ、ていうか。俺コレから体育なんで行きますね」

「ん……ああ、頑張って」

「はい！　……そだ。またいらしてくださいね。スーパー！」

話を済ませ、男に背を向け歩いていく店員を少しばかり見ている。

「アキホー。お前ジャージどうした？」

トコトコと、ポロシャツを着て紐のついた笛を首からぶら下げた先生らしき人が店員に近寄った。

「忘れましたー。今日見学で」

「お前あと4回休んだら留年確定だぞ」

「え、マジ？！　じゃジャージ貸して！　落し物とか学校に元からあるのとかあるっしょ」

男の時とは違い、ため口。少しイラッとした。それに言い方はアレだが何気に馴れ馴れしい。フレンドリーとでも言うんだろうか。

男はやっぱり学校の先生と仲良くするのは無駄な事ではないと思った。それでも、あそこまで行きたいとは思わない。

——色々面倒臭いだろう。

進路の事とか、日ごろの事だって。

中学時代の良い経験のおかげだった。男は中学の頃の先生と『無駄』になる一步手前のところまでスキンシップをしていた。先生は男にいつも話しかけてきた。だんだんウザくなってきたりもした。

だから高校に入ったら浅いところで先生とスキンシップをとろうと考えていた。

男は店員を、まるで昔の自分を見るように見ていた。

店員の笑顔は、何故か瞬間接着剤でガチガチに固めたように頭から離れない。少しイラッとした。

「先生、定時の2年生の……アキホって奴知ってますか？」

翌日、授業は情報と世界史と書道の3時間だけだった。午後からなんかの説明会があり、生徒は全員帰らされるらしい。男はちょうど良いと、書道の先生に近寄った。全日と定時の授業を同時に受け持つてるといふ書道の先生。その先生に、店員の事を尋ねてみた。別に理由はない。無駄な事をしてしまったと思った。

「アキホオ？ 多積秋穂たづみ あきはの事か？」

苗字は聞いてないから分からない。

「そうです、知ってんですね」

「あいつは結構さばり魔だからなあ。それに字が下手だ」

「……こないだスーパーに行ったらそいつに会って、昨日廊下でも会ったんです」

「へえ、そりゃ偶然だ。あいつは働くの好きだからな。授業終わりにたまった半紙捨てに行かせたりよくしてるよ」

用はコキ使われるような、そんな人間なんだって事なんだろうか。馬鹿な人間。そうなのか。

「アイツはバカだが、アホじゃない」

「……？」

男は頭の上にクエスチョンマークを立てた。意味が分からない。

——バカだけど、アホじゃない……？

バカもアホも一緒だろう。

「分かんないって顔だな。頭良いけど分かんない事はそりゃあるよな」

小馬鹿にしたような顔でそう言われたので、男はカチーン！ とした。男は確かに頭が良い。自分で思うだけじゃなく、他の奴らだっ

て男を頭が良いと、神童だとか、アインシュタインだとか言う。

「ちなみに言うが、お前はバカじゃないが、アホだ」

これはさっきのよりカチーンときた。尋常じゃなく腹が立つ。

——店員はバカだけどアホじゃない。俺はアホだけどバカじゃない？
なんなんだ。どういう意味だ。わけがわかんねえ。

無駄な事をしてしまったと思った。さっき思ったところで止めておけばよかった。もう足を突っ込むのも止めようかと思ったけれど、バカだけどアホじゃない、アホだけどバカじゃない。そんな意味不明な言葉を投げかけられ、止めようにも止められない。

——頭の良いこの俺が分からないなんて。

バカだのアホだの、そんな遠くも身近にあるような一般単語の違いさえも分からないなんて、そんなわけがない。無駄な事っていう以前の、ありえない。

「さ、早く帰れ帰れ」

話を^{ほの}仄めかすかのように、教師は男を書道室から追い出した。

男はなんなんだと頭を一掻きして教室へと戻った。SHRは4、5分ですぐに終わり、号令をかけて今日の授業は終わった。

「……」

男は全く、1%も教師の言った事を理解出来なかった。理解しようが無い。ロッカーの中に入っている辞書を開いても、そんなに違ような意味も無い。

「意味わからん」

意味が分からなかったの、男は店員のいるスーパーへもう1度立ち寄った。もしかして今日休みだったり？　なんて事も考えたけれど、スーパーへ向かった。

「あれ、……」

それでもやっぱりいなかった。今日は休みだったり、もしかして中に入って何かの作業してるとか？　店の中に居ない理由なんて考えれば結構ある。男は意味の分からん言葉を胸にモヤモヤさせながら店を出た。

「……」

「「あ」」

自動ドアをすり抜けて監視カメラも無視してスーパーを抜けた時に、ふいにすれ違い、その間に目があった。

店員だ。

「買い物、ですか？」

「あ、……いや」

バカだけアホじゃない。男にはその意味が全くもって理解出来なかった。辞書を開いたって、どこを見たってその違いが分からない。

「アンタを見に来た」

——そんなコイツを見て見解するのが早えんじゃねのか。

「……は？」

「ちよつと、バカとアホの違いをな……」

「……はあ？」

男は、自分の言っている言葉を聞いた店員が少しだけ引いている事に全く気が付かなかった。男が同じ男に「アンタを見に来た」なんて言われりゃ、そりゃ引かれる。当然だ。

「あんた、名前はタヅミアキホでいいんだよね？」

「え、ん……そ、 فقط」

「そうか」

一方店員は、男にそんな事を聞かれて、心の中をドキー！ っとさせた。もしかしてコイツホモっ気ある？ とか、もしかして俺今から掘られんの？ とか、いや、ちよつと待て俺これからバイトだから金稼がせろとか、そんな事を思う前にドキー！ っとさせた。別に掘られるだとか、金稼ぎだとか、そんな意味でドキーっとさせたわけじゃない。

実は店員は、ずっと前から男の事を知っていた。ずっと昔って言うっても、男と店員が高校1年の時の、もうすぐ1年生が終わるって時の少し前くらい。

「すげーコイツ、ずっと1位じゃん」

見知った友達もない癖に、驚きでつい口から言葉が零れた。そんな時の店員の目に映ったのは、期末テストの結果が貼り出された紙だった。廊下の掲示板に貼ってある、学年別の結果。1から10位までが大きく書きだされている。2から10位まではあまり目には入らなかった。店員は男の名前だけを見ていた。

高校に入ってから、意味も無しに期末や中間の順位貼り出しをずっとみていた。疑問に思い始めたのは貼り出されて3回目くらいだ。見覚えのある名前。だけど知らない。

「アマミヤ……」

店員はバカなので。

「アマミヤマミズ……」

真面目に真剣に、何の疑いも無しにそう呟いた。雨宮マミズと名前が分かれば、何故か好奇心が湧いて顔も見たくなった。情報科1年のA組ってのは分かった。だけどただそれだけ。全日と定時じゃ時間帯もクソも無いので、中学時代からの付き合いで、この学校の全日に居てそこそこ頭も良いお友達に男の写メを隠し撮りしてもらった。

——へえ……、こんな顔……

もつとがり勉で気持ち悪い顔だと思っていた店員は目を真ん丸くして釘づけになるように写真を見つめた。男は……何というか、それなりに普通一般の顔をしていた。

中間テストの結果を見るたびにその顔が思い浮かぶ。だからスパーで男に声をかけられた時ビックリした。そして少しガツカリした。

「ねえ、あんた何歳？」

自分は男を知っていても、男は自分の事を知らない。当たり前だった。分かっている。

「16です。今高校2年生で、それが何か？ ……ああ、定時生の高校に行ってるんです」

「定時制か。俺の学校も定時制あるよ」

少しだけ空しかったけど、でも話せて嬉しかった。

——俺、マミズと友達になりてえなー。

そしたら勉強だつて教えてくれそうだし、色々勉強の手助けしてくれそうだし。

店員は心の底からバカだったので、頭の良い奴に憧れた。だから次の日に学校で男と会えたのだって心の底から嬉しかったし、喋るとやっぱり楽しかった。

「あんた、名前はタヅミアキホでいいんだよね？」

自分の名前を分かってもらえて、心の底から、ドキー！　つとすら程嬉しかった。「見に来た」とか、そういう言葉には少しだけ引いたけれど。

——でも楽しいなあ。このまま携帯番号交換したり、遊んだり……あ、今からバイトだから出なきゃだし、てか学校あるし：休みてえ。ドキー！　つとした後に、心がウキウキした。

——そういやあ髪の毛も切ってたんだな、なんか新鮮だなー。

店員は男を友達に盗撮してもらった写真でしか見たことが無かったので、1年時の髪の毛が耳全体を隠すくらいフサフサとしていた頃しか知らない。男は店員の中ではもう芸能人みたいな扱いだった。

「俺も、……俺もアンタの事、知ってますよ」

「へー、そうなのか……」

——友達、友達。

「アマミヤマミズですよ。変わった名前してますね」

まさかマミズって名前が間違っているともしらずに、店員は『シミズ』の目の前で当たり前の如くそう言った。男はまさかそう来るとは思っていなかったの、反射的に突っ込んでしまった。

「淡水！」

我ながら分かりづらい事を言ってしまったと反省は少しだけした。そして、そう言えばと思い出す。

——コイツはそうだ。バカだけどアホじゃないんだ。……だからバカ

だった。

要はバカだった。そんな塩分の足りない名前を誰が付けるのか。

「俺はマミズじゃなくてシミズってんだ」

「シミ……え？」

店員はまさかずっとマミズと呼んでいた男がシミズと言う名前だったと言う事実を聞かされ、硬直した。いやでも1文字違い。そう思った店員だったけれど、男にしてみれば『それでも』1文字だった。

「苗字みたいな名前……」

店員の言葉。確かに男だって度々思う事もある。怒りは湧かなかった。

「でも良い名前だね」

「……？」

「真水って書いてシミズでしょ、多分タンスイもそうだし、きっとサンズイ付く清水とも掛けてあんだね」

「そののどこが良いんだよ？」

「え、だって。……淡水って地球上にしか無いし、それに結構重要ってか、主要じゃなか。あ、あと、サンズイの清水はショウズとも読むでしょ」

知らない。

「ショウズは聖水とか浄水とか、そんな感じのモンだったじゃん、意味？　つつうのかな？」

知らない。

「だから、真水って、色々な中での特に大切なモノと言うか、それに聖水とか浄水とかが加わったら、なんか綺麗な感じがする」

男はそんな事、聞いた事も考えた事も無かった。確かに何度も変な名前だと思った事がある。店員がマミズと間違えるのは分かる気はする。

それでも、そこまで深く自分の名前を考えた事は無かった。無駄だと思う前に、そんな事、思い付きもしない。……なのに店員は、

自分のちゃんとした名前を知ってすぐ、そんな事を言った。男はビツクリした。

——こいつは、バカなんじゃ。

「だから、良い名前」

『アイツはバカだが、アホじゃない』

——そういう事か？

『お前はバカじゃないが、アホだ』

——なんかわかった気がする。

ちゃんとした説明は上手く出来ない。でもその上手く説明できない何かが、自分の心の中にストンと上手くはまった。正解だろうか。「物知りなんだな」

「ん？ ああ、いや。こんな生活してると、結構ウンチクとか聞いたりすんですよ」

——こんな生活？ 定時制に言ってるって事か？

男はなんだか、店員が羨ましくなってきた。自分には考えられない、頭に思い付きもしなかったことが、口から出てくる店員に。「俺もこうなりてえかも」なんて思う。

「いいなあ、お前」

「は？ なんで……？」

「定時制行ってて、羨ましいよ」

「……へ……」

男は、店員がアホじゃないのを定時制に行っているからだと完全に誤解していた。

「俺も定時制いきてえな」

今更もう行けやしないのだけれど。

「俺は親に推されてこの学校入った。多分大学だって親に進められる。それで卒業したら会社に就職するんだ。もう未来が見えてる。つまらないだろ。……だから定時制行ってるお前はいいな。」

「……」

その言葉に、店員の顔がみるみるしか顰められていくのを、男は見よ

うとすら思わなかった。ただ真剣に真面目に純粹に、店員はいいな、なんて思っていて、その理由をそのまま口にただけ。

男はアホなので。

「――楽しんで」

思った事をそのまま口にしまくった。それが相手を傷つけているなんて事は知らない。思ったって、無駄だろうか。

「ふざけんなー!!」

少し間を置いて聞こえた大きな声で、男は耳をキーンとさせた。

――なんだっ……なんだっ??!

茫然とした。

「友達になりたいとか思った俺がバカだった!」

――ともだっ……え?!

「アンタがそんなKYな奴なんて知らなかった!」

勿論男はKYなんてそんな略語は知らない。男には知っても無駄だった。

「未来が分かるならいいじゃねえか! つまなくなんか無い、おかんとおとんに謝れ! 高校も大学も進めてもらって、そんなはおかしい!」

――そんなんってどんなんだっ。

「そのくせ定時制が良かったとか、バカにすんのもいい加減にしろやあつ! そんな風に思ってたんなら是非俺と変わってたんだ!」

――バカにするって……お前バカ……ってか、いや……ええっ?

男は店員が何で怒ってるかなんか到底理解できる筈も無かった。アホだから。

「もう話しかけんな! スーパーも来んな! 顔も見せんな!」

そして店員は怒りながら裏口からスーパーの中へと入って行った。

「……」

そう思っていたら、またこちらに戻ってきて。

「アホォー!!」

と、さっきよりも大きな声で男にそう言って今度こそ裏口に消え

て行った。

「：あ、アホ？」

『お前はバカじゃないが、アホだ』

無駄な事は覚えなないと、それはつまり時に人を傷つけたり、それはたまたまKYの元凶だったり。無駄な事は覚えな、それが一番無駄な事なんだという事を、男は考えようもしない。

男にとっては、それは無駄な事なので――。

限りなくアホ（後書き）

次話 ↓限らない君

NEXT ↓丘の上で待ってる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5720r/>

短編

2011年11月8日14時08分発行